

第16回 蘇東坡は弟との別れから一つの事実を得た

——我が生は飛蓬の如しわ せい ひほう ごと

2018年6月3日（日）。

「あとどれくらいで終わるのかなあ？」

「おや、イノ君ですか。いつきたんですか？ そうですnee、あとこのあたりを刈り取って、それからトマトやキュウリのまわりの草を抜いたら、ひと段落でしようか」

「やっぱクセなんだね。あのさあ、『ひと段落』っていうのは、間違いらしいよ。正解は『いち段落』。叔父さんって、小説なんか書いてるわりには、ときどき日本

語がおかしかったりするみたい。この前ネットで調べたら、『ひと区切り』と『いち段落』が混合して『ひと段落』と誤読されるようになったらしいって書いてあったよ」

「なるほどねえ。だったら、ハイブリッド型に言葉が進化したということですね。進化形をすかさず使うのは、言葉の変化に鋭敏だということではないでしょうか。それと、音の響きも、『いち段落』よりは『ひと段落』のほうが、ソフトでほっとするような感じになりませんか？」

「すなおに間違いを認めないんだから……。まあ、いいか。ボクだって、ら抜きことばがいけないとかいうのが、ホントのところピンとこないもの。『見られる』なんていうと、余分なものをはさんで、舌がレロレロして気持ち悪いくらいだもんなあ。とにかく、まさおちゃんが終わったら、コーヒータイムだね。もうす

ぐ3時だし」

「そういえば、このごろは3時ちようどぴったりではなく、結構時間がずれたりしていないですか？」

「そういうこだわりは疲れるから。でも、こだわらないようにしようとかたわるのも、やっぱり疲れるんだけど……」

「なかなかややつこしいですね。で、『まさおちゃん』って、草刈、正雄のごく古いしやれですよ。言葉の進化に敏感なわたしとしては、ここは新しく、『もう、いいんだ、草刈り全部終わったよね』てなことをいって、コーヒータイムに誘ってくれるとよかったりするのかも……」

「なんのこと？」

モウイング

「mowing と『もう、いいんだ』のしやれなんですけど」

「わっかりにくつ！ まったくくだらないよ。とにかく、もういいってことにしようよ。コーヒー豆とカステラを買ってきたから。いつもご馳走になってばかりなんで。ほら、いい香りがするでしょう。いま焙煎してもらった高級な豆だよ。カステラはコンビニの安いヤツだけど」

「ほう、誘惑に負けたいところですが、もうすぐ梅雨入りらしいので、今日うちんちにやっつけてしまいたいと思っていて、あと少しだけ……」

「なら、ボクも手伝ってあげっかな」

「ありがとう。それで、さっきから草刈りをしながら考えていたのですけど、わたしの場合、どうも小説を書くのも庭仕事も同じようなものかなあ……と」

「どういふこと？」

「イノ君がいつもいうように、わたしのホームページは見てくれる人などだれも

いません。それでも地道に書いています。草刈りも地道に作業をして、でもまたすぐに草は伸びてしまつて、また地道に作業して、そうしたからといって、この庭を誰かに見てもらうとかいうことはありません。同じですよね」

「そつかなあ、よくわかんないけど……」

「このところは、イノ君がもつてきてくれる音声データを整理するので精一杯で、ほかの作品は書いていませんけれど、それもいいかと思つたりもしています。

「今日も、もつてきたのでしょうか？」

「そうなんだけど、なんか悪かつたりしたかなあ。『游たびの奇絶』を聞いてくるなんてことを思いついちゃつたために、叔父さんの時間をすっかり使つてしまうようになって。まさか、こんなふうになくなるとは思わなかつた……もう2年になるのに、トバー君の『游たび』はまだ序盤みたい」

「草刈りより盆栽にたとえた方がいいのかもしれないです。わたしは盆栽作りをしているわけではありませんけど、盆栽は毎日世話をして、いい形になるには何十年、場合によっては100年以上もかかるらしいです。世話をし続けることがきつと大切なのでしょう」

「これから何十年もトバー君に付き合おうってこと？ それはムリじゃない？ ボクにはそんなこだわりはないし、叔父さんだって、ホントはほかに書きたいものがあつたりするんじゃないの？」

「なくはないです。でも、『太郎』の続編をイノ君が書いてくれるのなら、それはそれでいいわけですし……」

「この前のあれは、続きがあるかどうかわかんないなあ。あとで考えてみたら、津波でリセットしようという発想がよくないと思うんだよねえ。被災した人たちが

にとつてはとんでもなくいやな感じだよね、きつと」

「何をどうリセットしようとしているのか、この前見せてもらったものだけでは推測できませんけれど、自然の猛威の恐るべき破壊力がなかったならば次の新たなものが生み出されなかったということは、地球の歴史でいくらでもあったので、発想自体は悪くはないと思いますよ。地球に巨大隕石が衝突して恐竜が絶滅してくれなかったら、われわれは存在していないわけですし……」

「そういうこともあんのかもしれないけど、なんかひっかかるんだよなあ」

* * *

㊦ 今夜は早速、詩を一つ聞いていただきましょう。

するすると 旅行く空に 帆は張られ、

はらはらと 風に誘われ 我が涙、

清く流るる 川面に落ちぬ。

ゆらゆらと 船も景色も 皆揺れて、

ぐずぐずと 心留むも 甲斐なきや、

惜しんで尽きぬ 別れの思い。

——ちよつと待つて。いきなり朗々と声を張り上げちゃって……ほら、まわりからみられて、ヤバくない？ それに、なんかいつもと調子が違わない？ えーと、五七調とかだったたりした？

㊦ たまにはそういうのも悪くないかと思ひまして、あらかじめ用意してきたのを忘れないうちにと、まず一番にご披露したのですが、あまりよくなかったでしょうか。日本語を母国語としない私には、五とか七とかの字数に合わせるのがそれなりに大変で、頑張ってみたのですが……。

——率直にいつて、努力した割には……ってなところかな。ごめん、気を悪くした？ ボクって率直すぎるよね。

㊦ いえ、忖度無用で言つて下さった方がいいです。

——五七調つていうのはさあ、音の響きはいいのかもしれないけど、ただそれだ

けのことで、響きがいいと、それだけ空疎な感じがしてしまうのかも。いまどき五七調の歌なんかゼンゼンはやってないじゃん。現代の感覚と合わないんだと思うよ。それと、このごろ短歌とか少し読んでみたりしてるけど、あれはもう完全に五七のリズムなんだけど、その決まったリズムに頼るんじゃないかって、逆に強固な形式と張り合うくらいでないといけないのかなあって、そんな感じがしたりしてるんだ。ボクが自分で短歌を作るわけじゃないんだけどさ。

Ⓣ たまには変わったこともと、五七調にチャレンジしてみたのですが……。この続きはお蔵入りにして、改めて最初からいつもの感じで行きましようか。

旅行く帆を西風に掛けると、

別れの涙が、清らかなえいすい潁水の流れへと滴り落ちる。

ぐずぐず留まろうとしても益はない、

わかつてはいても、

いまのこの瞬間の光景を惜しまずにはいられない。

我が人生において、

君との別れはかつて三度あったけれど、

この四度目が最も痛ましい。

思うに、君は父上に似ていて、

木訥ぼくとつにして、「剛ごう」かつ「静せい」である。

『易経えききょう』に言うところの、

「良い人は言葉数が少ない」とは君の「静」、

「石のように固く、機智に富み賢い」とは君の「剛」である。

今に至るまで、天下の士で、

朝廷を去るに当たって君ほど勇猛であった者はいない。

私は長らく「狂」キヤウを病む者となり、

ぼつかりと大きな穴が開いているのにも気付かずに歩いてきたようだ。

酔っ払って落ちてしまつて、

幸いにも、醒めたら傷を負っていなかったようなものだったのだ。

これからは、暇を得た折などには、

黙って座つて日を送るようになるつもりだ。

君がもう心配しないですむよう、

そのことをこうして詩に詠み込み、

一日に三度は反省するようにするよ。

——ああ、わかった。「君」といつているのは、弟さんのことだよ。前回聞かせてもらったのは、弟さんと一緒に大恩人のいる町にまできて、そこからトーバー君は旅の先を続け、弟さんは帰って行って、そのときの別れの詩だよ。

㊦ その通りです。えいしゅう 穎州で別れ、私は杭州こうしゅうに向かい、弟は陳州ちんしゅうに帰りました。

そのときの二首の詩のうち第一首目をまず聞いていただきました。

——別れの涙が川に落ちるといふのはかなりキザっぽいかも。トーバー君のことだから、ホントに泣いたんだらうなあ。いまの詩から推測するに、弟さんは、別

れぎわに、ことばを慎むようにとか、なんかアドバイスをしたのかな。それで、

1日3回反省しますっていったんだよね。

㊦ 都を出て私は解放感を味わい、さらにおうようしゅう歐陽脩から刺激を受けて、以前のよう

にもものを言い過ぎるようなところが出て来たを見て、くれぐれも気を付けるよう

と弟に言われました。そうしたアドバイスは、昔のおうえん王衍のように言葉ばかりが巧

みで実のない才人になってはいけないとの父の戒め **第11回**と同じでありま

したから、弟はまさしく父に似ていると改めて感じたのでした。

——えーと、4度目の別れと違ってたけど、蘇東坡検定初級保持者の面目にかけて、これより前の3回がいつであったのか、当ててみせよっかな。

新しい順にいうと、3度目というのは、弟さんが陳州の学校の教授に招かれて都を出たときだよ。それは簡単にわかるけど、その前はいつだったっけ？ トーバー君が官僚になって最初の仕事として鳳翔ほうしょうに行ったときの別れかな？ たしか、そんなときは、弟さんは都の外にまで同行したんだよね。そして詩があったように思うけど、どんな詩だったっけ？

㊦ そのときの詩の一部は **㊦ 第6回** ——

酒に酔ったかのような、
ゆらゆらするこの感覚。
我が心はふわふわと抜けて、

君の馬に追いつがろうとする。

君と一緒に父上のもとへと戻って行けない私は、

置きどころを失ったこの心を、

誰と慰め合ったらいいのか。

——そうだった、そうだった。酔ったような感覚というのが、ちよつとおもしろ

いと思ったんだ。トバー君は、それほどお酒に強くないから、独特の酔い心地

だったりするのかもね。そして、この詩を作っているときに馬正卿さんはせいけいと出会っ

たんだよね。だんだん思い出してきたけど、あともう1回の別れっていつだった

んだろう？ それより前？ 後？ わかんないなあ。これじゃあ、初級も返上し

なきやダメかも。

㊦ 2度目の別れはあまりはつきりとお話していなかったと思います。鳳翔での任期を終えて都に戻りますと、今度は弟が地方官として都を出て行きました。それが2回目です。

弟と過去3回の別れがあつて、私は必ずその後で精神的に不安定になっていきます。鳳翔に行つて5月病になつたことは詳しくお話しました(㊦ 第7回)。都に戻つてからは相次いで妻と父が亡くなつてかなり気落ちし、そして3度目のときは、一人都に残つて改革批判を続けたのですが、次第に気持ちが萎えて、真実の言葉を出せないようになってしまいました。

そうしたことがあつて、4度目の別れが最も痛ましいと感じられたのです。そして二首目は――

別れがすぐ近くに行くだけのものなら、

ことさらに表情を変えることもないだろう。

別れがひどく遠くに行くものなら、

涙が胸を濡らすであろう。

しかし、隣にいても会わないでいるのなら、

地球の表と裏にいるのと変わりはない。

人生に別離というものがなければ、

恩愛の重さを知ることはない。

私が宛邱えんきゅうに着いたばかりのとき、

君の子どもたちは私の衣を引っ張って踊った。

その瞬間に、私は別れの悲しみがあると知った。

だから、秋風が吹き過ぎるまではと、

君のところに留まったのだった。

もうとっくに秋風は終わってしまい、

別れの恨みは窮まるところがない。

君は問う。

「いつ帰って来られますか」

私は言う。

「木星が東の空に見えるときだろうか」

天界の星は常に巡り巡っている。

別れと会うも常に巡り巡っている。

そして、憂いと喜びが常に攻め合っているのだ。

こうしてここまで詩を詠んで来て、

私は大きく長く嘆息する。

我が一生は結局のところ、

根がなくて風のままに飛ばされる蓬のようなものであるのだろう。

ああ、憂うのはもうよそう。

憂いが多いと髪が早く白くなってしまふ。

その最たる証拠として、

君も見るがいい、

ろくいちおおう

六一翁がそこにおられるのを。

——えーと、最後は笑っていいところだったりする？ 「六一翁」って、「六一居士」こじ、つまり大恩人の欧陽脩のことだよ。欧陽脩って、若いころから白いものが多い、このときは真っ白だったんだよ。兄弟が右と左に別れるのを川岸で見守っていた欧陽脩を指さして、憂いてばかりいるとあんなになってしまっぞって。っらい別れを笑いに転化する……そういうオチか。

㊦ 一つだけ説明を補っておきますと、「根がなくて風のままに飛ばされる蓬」というのは、日本でよもぎ餅に使われるような蓬とは別の植物です。乾燥地帯に生え、秋に地上部が枯れると、強い風に吹かれて地面から抜け、ころころと毬のように原野を転がります。

原詩では、

我生如飛蓬（我が生は飛蓬の如し）
せい ひほう

です。風のままに転がるその姿から、「飛蓬」は身を置く寄る辺のない旅人の譬えとしてよく用いられ、特に唐代の詩に多く見られ、いわば手垢にまみれた表現だったのですが、弟との4度目の別れに際し、自分の人生は、自らの意志によらない「飛蓬」のようだとのイメージが忽然と湧いて来たのでした。

——ふーん、それはわかったけど、「地球の裏」っていうのはおかしくない？ 地球が丸いなんてことは、当時の人は知らなかったはずだよね。

㊦ わかりやすいようにと思つて、「隣」と「地球の裏」の対比にしてみました。すが、やりすぎでしたか。もとは「咫尺」と「千里」の対比でした。咫は8寸、尺は10寸で、どちらにしても30センチくらいです。顔が付くくらいのところにおいてもちゃんと会わずにいたら、千里離れているのと変わりはないと、そういうことを言ったのですが、たとえ地球の裏側でも電話もメールもすぐにつながる現代では、いずれにしても通用しませんね。

——えーと、トバー君の詩つて、正直いつて、よくわかんないのもあるんだけど、弟さんに向けて詠んだのは、いつつもいいような気がする。正直な気持ちが出ているからなのかなあ。

㊦ 弟と別れて潁水をしばらく下り、渦口かこうというところで淮河わいがに入りました。淮

河は、北の黄河こうがと南の長江ちようこうの間を、やはり西から東に流れる大きな川です。淮河は地理的に重要な境界線、すなわち中国を北の華北かほくと南の華南かなんを分ける境として認識されてきました。広い中国は北と南とで自然条件が大きく異なり、文化的な伝統もかなり異なります。淮河の北と南でいきなり異なるわけではないのですが、私は淮河に至って、ここからは華南の地であるということ強く意識しました。今回も都に馴染むことができず、華南において新たなものが開けるのではなからうかと、ほのかな期待を抱いたのです。

しかし、すんなり境界を超えることはできませんでした。潁水が淮河に入るところで流れが渦のように廻るので渦口と言いますが、渦口まであと5里ほど、つまり3キロほどのところで強い向かい風が吹き出し、前進できなくなりました。

それは熙寧^{きねい}4（1071）年10月2日のことでした。

淮河に向かっていた間は、

久しく風がなく、流れのままに、

滑るような心地良さを存分に味わっていた。

今朝は、

雪を投げつけるような白い波が一面に立ち、

平野が狭まって来たと感じ始めると、

我が前に二つの山が立ち塞がった。

その間から吹き出て来た風のために、

川の水は吐かれるのか、呑まれるのか、ここで滞ってしまった。

桑の木の根元に船を繋ぎ、

ざぶんざぶんと波間に舞い続けて、

夜を明かすことになった。

船頭達は懸命に声を掛け合い、

草を縛^なっただけのような弱々しい綱を頼みとして、

どうにかこうにかしのごうとしている。

私は普段から偉そうに、

憂患なんぞ何ものぞ、

奇怪なことにも驚くものではないと、言っていたので、

鬼神どもは私をこの危難に置いて、

「ぐう」と言わせてやろうと、

このような戯れを仕掛けて来たのだろうか。

どれどれ、

瓶かめの中にはまだ酒があったはずだ。

酒があるのなら我が運も尽きはしない。

それが今夜の結論である。

——ふーん、「酒があるなら運は尽きない」——なんかいいかも。これを座右の銘にしようっかなあ。ちようど追加のドリンクがきたし……。

でも、ちよつと安易な「結論」って感じもするかも。トバー君って、難しい試験を突破し、若くして朝廷で活躍し、順調に人生を歩んできたわけだけど、自身の信念に従って改革を批判した結果、都を追われ、飛ぶ蓬になってしまったん

だよ。風に行く手を阻まれた船に自分の運命を重ねて、悲嘆の叫び声をあげるのって、なんか詩になりやすそうだけど、そうはしないで、「酒があるのなら運は尽きない」というところがトバー君らしいんだろうけど、なんか安直な感じがしないでもないなあ。どしろろとのボクがちよつといいすぎかな……。

ⓧ 悲嘆の叫びを、鋭利な感覚で究極にまで高めたのが唐の時代の人々でした。

てん なが ち ひろ
天は長く地は闊く、岐路多し、

み すなわ ひほう じち むず うきくさ
身は即ち飛蓬と共に水の萍。

ひつば まさ か あ ようい
匹馬を将に駆ろうとして豈に容易ならんや、

ていけい しんこ りてい み
弟兄親故 離亭に満つ。

これは唐の時代の欧陽詹おうようせんという人の七言絶句です。欧陽詹は都に上るために郷里を発ち、前に進もうとしても進み難く、振り返れば大勢の親類一族がいつまでも立ち去らずにいるのを見て、強い感情が湧き立ち、それが高まるがままに詩を詠みました。前途に大いに期するものはありながらも、詩は悲哀の情に満ちています。これが唐の詩の流儀です。気持ちを最大限昂ぶらせてこそ詩は詠まれるべきものであったのです。

この詩は、我が大恩人にちなんで同姓の人のを選んでみたまでで、唐代の詩としてはごく標準的な出来栄えといつていいでしょう。

私の先の詩は、このような唐の詩とは異なり、気持ちを一点に集中させることがないので、あなたがおっしゃるように、安直に流していると見られても仕方な

いところがあるのかも知れません。

欧陽詹の詩には特に難しい語彙はなく、情景描写も比喻も非常にわかりやすく、読めば容易に作者の気持ちの高まりを追体験できます。唐代にはこのような詩が無数に作られましたので、その後が続く人たちは、どれほど感情を昂ぶらせて懸命に叫んだところで、唐の詩の亜流もしくは模倣にしかならないということになってしまいました。我々宋の人間は、もともとが理屈を並べるのが得意でありませんでしたから、唐の詩の流儀を真似るのは所詮身の丈に合っていません。それで悲嘆を理屈で緩和すると言いますか、抑え付けると言いますか、乗り越えると言いますか、アウフヘーベンすると言いますか、そのようなことになって、嘆かない、叫ばない詩を詠むようになって行ったのです。感情がピークに達して、ここは嘆きどころ、叫びどころというようなところで、すっと鎮静化してしまうので、

突き詰め方が足りない、安易に悲哀を回避していると見られなくもないということになりました。

——アウフヘーベンかあ。やつぱトバー君って、そのへんの世代の人なのかも。いや、もちろん宋の時代の人なだけど。アウフヘーベンって、ボクらは使わなけれど、「希望の党」ですっかり失速しちゃった知事さんのお得意のボキヤブラリだったりするよね。

㊦ 欧陽詹の詩に、水の浮き草とともに「飛蓬」が寄る辺なき身の譬えとして用いられています。元來人はしつかりとした足場の上に立っているべきであるのに、自分はそうではないということ、悲嘆の叫びになるのです。一方で、弟に向か

って「我が生は飛蓬の如し」と詠んだときの「飛蓬」は、欧陽詹の「飛蓬」と同じようできて実は少し異なるものがあります。

——えーと、ちょっと待って、その違いがなんかわかるかも。「飛蓬」であることが、必ず嘆かなければならないことなのかってことだね。トーパー君は「飛蓬」であることを受け入れよう、肯定的に捉えようとしているんだよね。風任せの蓬でよいではないか、波任せの浮き草でよいではないか、それも、仕方なく「まあいいかあ」というのではなくて、積極的に「これこそがいい」という……。

㊦ 弟に詩を送った時点ではそこにまでは至っていませんでしたけれど。

——つまり、波任せのサーフィンの思想だよな。「飛蓬」のアウトフヘーベンってことかな？ 実のところ、アウトフヘーベンの概念がボクはわかっていないんだけどさ。

とにかく、詩人というのは、旧来の詩の亜流や模倣にならないために、常に格闘するものらしいね。さっき短歌のことをちよつとだけいったけど、古く万葉の時代からずっと格闘してきたみたいだね。

そっか、ここでボクの責務を果たしておこうかなあ。ジョン・クレアも、やっぱ格闘していたんだよね、イギリスの詩の流れと、そして自分自身の詩とも……。

ああ、詩は衰えていき、

もはや想像力が生み出すヴィジョンにまったくふさわしくない。

私は詩の顔がほとんどわからない。

自然自身引越しつつあるように思われる。

野原は古びて、個性のないものになりつつある――

草、空、吹き渡る風、

そしていまなお美がしがみついている多くの場所――

それらは「われわれはみんな衰えつつある」と嘆いている。

ああ、詩が衰えていく。

私は彼女の顔がどのようであるかほとんどわからない。

(鈴木蓮二訳 172ページ)

これは長い詩の最初の部分なんだけど、これだけでもだいたいのことはわかった

りするんじゃないのかなあ。解釈の仕方はいろいろあると思う。ジョン・クレア自身の詩についていってるのなら、これまでは自然からたくさん啓示を得て詩がいくらでもあふれ出てきていたのに、いまではそうではないと……。それに加えて、詩そのものにも危機感を抱いていたということもあると思うんだ。

㊦ 真剣に取り組むなら、必ずそのような悩みに突き当たるのでしよう。詩には無限の可能性が 있습니다。我々が手にし得たのはその内のごくわずかで、一人一人が自身の詩の限界と格闘しなければ、新たな可能性は何一つ拓かれはしないのです。

風に阻まれた翌朝は、一転して無風状態となり、潁水からいよいよ淮河に入りました。大河の流れはごく緩やかで、船は遅々として進まず、一日かかってよう

やく寿州じゅうしゅうというところに至りました。その途中での詩。

我が旅は、

長江へ、そしてその先の海へと、

日夜、向かいつつある。

河畔には、

楓の葉が赤く色付き、蘆の花が白く突き出て、

秋の感興は深まるばかり。

淮河の流れは平ら過ぎて、

天と水と、どちらが遠くどちらが近いのか――。

彼方の青い山々の並びは、

船とともに高くなったり低くなったり――。

すでに寿州の白石塔が見えて来ている。はくせきとう

しかし、船の棹はいつまでも黄茅の岡の下にある。こうぼう

波はなく風は軟らかく、

望み見ても到ることができない。

あの青くぼんやりとした夕靄の中に、

友は久しく立っていることだろう。

――前の晩は強風にさらされてせつぱつまった感じで、今度はのろのろと一転してのんきな感じに……昔の旅ってホントにお天気次第だったんだね。

㊦ この詩は一見すると、おっしゃる通り呑気な感じで、とくに日本語ではそのようにしか訳せなかったのですが、実はさほど単純ではありませんでした。敢えて漢文の授業のような解説を加えますと、第一句目は、

我行日夜向江海（我が行は日夜 江海に向う）

です。「江海」とは長江と東シナ海。旅の目的地である杭州は長江の南、東シナ海沿岸部にあります。都を後にし、日夜「江海」に向かいつつあるという情景は、唐の詩であれば、それだけです。に悲哀を感じさせ、次に、それをより高める句が来るであろうことを予感させます。

しかし、私の第二句は、

楓葉蘆花秋興長（楓葉ふうよう 蘆花ろか 秋興しゅうきよう 長しなが）

と、川岸に見える秋の景物を詠み、秋の感興を楽しもうとしています。これがつまりは唐の詩からのアウフヘーベンです。音楽に譬えると、暗い展開を予測させる序奏から、一転してのびやかなメロディーが生まれ出てくるような感じでしょうか。

——ヘーエ、そう？ 訳詩を聞かせてもらったときにはゼンゼン気づかなかったけど。

㊦ この詩は形式で言うところ七言律詩です。七言律詩は、唐の人達が磨きに磨いて完璧に仕上げた形式で、詩人の実力は七言律詩において最も発揮されると思われていました。

七言律詩では3句目と4句目が対句のペアになっています。

平准へいわい忽迷たちま天遠近てんえんじん
(平准 忽ち迷よう 天の遠近)

青山久与船低昂あせやふねひさう
(青山 久しく船と低昂)

左右見比べてもらいますと、一文字ずつ意味も音律も対になっていて、一字が一音節で一つの意味を成すという中国語の特質が最もよく活かされています。「遠近」とは3次元空間におけるx軸およびy軸で、「低昂」とは高い、低い、つまり3次

元空間におけるz軸です。この対句で、x軸y軸、z軸が自在に伸び縮みすること、すなわち、人間とはおよそ一定することのない時空を旅するすこぶる不安定な存在であることを表現しているのです。

——ふーん。超理屈っぽい解釈だね。

⑤ 5句目と6句目も対句で、

寿州已見白石塔すで 已に見る白石塔はくせきとう

短棹未転黄茅岡たんしょう いま 未だ転ぜず黄茅岡こうぼうこう

茫漠として伸び縮みする不安定な3次元空間に、白石塔と黄茅岡という確かな固
定点を置いて自己の位置を明示した上で、視覚は瞬時に遠方まで認知するけれど、
自身の肉体は現在の位置に束縛されるという、人間存在に関する若干の省察を詠
み込みます。

——ますます理屈っぽさ全開だあ！ 詩は理屈で理解すべきものではないように
思ったりするけどなあ。

㊦ 結びは、

波平風軟望不到（波は平らかに風は軟らかく望んでも到らず）

故人久立煙蒼茫（故人は久しく立たん 煙の蒼茫たるに）。

「故人」とはいまの日本語で言う「亡き人」という意味ではなく、「古い友人」です。暮れなずむ夕靄の中でさぞ待ちくたびれているだろうと、その友人との楽しい再会を想像させて、詩を終えます。もはや都を離れての悲嘆など、微塵も感じさせません。こうして唐詩からのアウフヘーベンを完遂させたのです。

そして、細かくいうと、この詩には音律が規則に合致していないところがあり、またわずか56文字の詩の中で、「平」と「久」の文字を2回ずつ使っていて、七言律詩としては粗雑なものであると言わざるを得ません。それでいいと、私は考えたくありません。

——いまのトバー君の詩は、原詩を見せてもらっても、特別に難解なところはないようだけど、深く鑑賞するにはそれなりの考察が必要ってことみたいだね。

① 日本語の訳の中にそれとなく織り込むことができれば、いちいち小うるさい解説などなくてすむのでしょうけど、そこまでの技量がありませんで……。

——漢文の授業を眠ってばかりいたボクがいうのもヘンだけど、わかりやすければそれでいいってもんでもないと思うよ。一瞬でわかるものばかりではないってことも、たぶん大切なんだろうね。少しでもわかりにくかったりすると、それはこっちのせいではなくて、そっちのせいだと、思ってしまう傾向がいまはあるのかもね。ボクもそうだったんだけど、ジョン・クレアの詩を読んだりするように

なったところから、少しずつ変わってきたのかも。一瞬でわかった気にさせるようなものばつかじや、脳ミソが鍛えられないもんね。

世の中には、たぶん、意味なくただ難解なものと、難解でなければならぬものの2種類があるんじゃないのかなあ。その見きわめは簡単ではないけど、ときには脳ミソが納豆になるくらい必死に考えることも大事なだろうなあ、きつと。でも、やっぱ酔っ払ってくると、トバー君の解説もネコに念仏で、なんのこただかわかんなくなっちゃうかも……。

㊦ 寿州に着きますと友人らと会いまして、町を離れるに際し、寿州の長官が送別の宴を設けて下さいました。宴席ではいつものように詩を詠み合い、訪れた者としては、御当地の名所等を詩に詠み込んで相手を喜ばせるというのが一つのお

作法としてありましたから、このときは竜潭りゅうたんという名の、いかにも竜でも潜んでいそうな雰囲氣の古めかしい池を詩の題材としました。

カーカーと山の鴉からすが騒いでいる――

神靈が宿っていそうなこの古い池。

竜潭の名の通り、

竜が吐いた息のような泡がぷくぷくと水面に浮き、

竜が吐いた涎よだれのような淀みが船のぐるりを取り巻く。

闇に潜む妖怪を照らし出すために、

犀さいの角つのを燃やすようなことはできなくても、

底に潜む竜を誘い出すために、

雀を焼くくらいのはしてみたいものだ。

長官が別れを惜しんで笛を吹いて下さると、

その音が近隣の村々に響き渡り、

猿たちが聴きに集まって来る。

いつの年かこの土地を訪れる人が、

猿にも及んだ長官の仁愛を讃えて歌うときには、

この池の魚にも聞いてほしいものだ——

長官がここで私とそうじ莊子と同じような問答をしたということ。

——とくに難解というわけではないんだけど、説明なしだとわかんないところが
あるかも。サイの角を燃やすとか、スズメとかサルとか魚とか、それらはどうい

うーと？

㊦ 竜との縁で、人間界の外にあるものをいろいろと並べてみたまでです。犀の角を燃やして化け物を照らし出したとか、焼いた雀を餌にして竜をおびき出したとか、猿が笛の音を聞きに集まって来たとか、それぞれについてそれなりの伝承があります。それらを解説してもいいのですが、子泣きじじいとか砂かけばあとか、そのような感じのものだと思ってくださるくらいでよろしいのではないでしようか。

——ん？ よくわかんないけど。

㊦ 全体としては、長官の徳が人間界の外にまで及んでいるという感じのことを言っていると受け止めて下さるとよろしいかと思えます。宴席を楽しく盛り上げようと、やや過剰に長官を褒め称えたというところですか。

最後の莊子の問答については、この後の詩で解説しましょう。

寿州を発ち、150キロくらいのところに濠州（こうしゅう）というところがあり、しばらくその近隣の名所を見て歩き、いわば記念写真を撮るようにして七首の七言絶句を詠みました。その中から三首を聞いていただきました。

神秘的な伝承の続きで、800歳まで生きたとされる彭祖（ほうそ）という人がいまして、濠州には彭祖を祀った廟がありました。現在の彭祖廟は徐州市大彭鎮（だいほうちん）にあり、文化大革命のときに破壊されましたが、1992年に再建されています。

彭祖は殷いんと周しゅうの時代をまたがってその盛衰を見て、

亀と長寿を競った。

それでも、山中の雲母うんもを仙薬にして飲んだのも虚しく、

三千年に一度だけ結ぶ西王母せいおうぼの桃の実は見られなかったのだ。

——えーと、西王母っていうのはたしか女の仙人で、西王母が育てている桃を食べると長生きをするって話だっけ？ 桃栗3年柿8年、西王母の桃は3000年つてことだね。ボクって、なんでこんなことをしてんだろう？ トーバー君から聞いたのかなあ。

800歳ほっちの寿命では桃の実が見られなかった……西王母の桃を食べて長生きしようと思ったら、まずは3000年くらい生きないとならないっていうの

は、なんかおかしいかも。

① 次は浮山洞ふざんどうという洞窟での詩。浮山洞の口は淮河に向かって開いていて、水量が多くなる夏場にも洞窟の口に川の波が及ぶことがなく、かといって水量が少なる冬場でも水面からの高さが変わらないので、浮山洞は水に浮いているというのが昔からの言い伝えでした。

浮山洞は遠く東の海の底無しの谷に通じていると人は言う。

底無しの谷の上には波と共に五つの島が浮き沈みしている。

船に乗ってその島を見るなら、上がるやら下がるやらわかりようがない。

大地は水に浮き、水は空に浮いている。

そもそも物の浮沈など誰も知りようがないのだ。

——さつき地球の裏側っていつてたけど、大地は水に浮き、水は空に浮いているという自然観だったんだね。地球って水の惑星っていうよね。大陸はプレートに乗ってあちこち動いているんだから、大地は水に浮いてただよっているとみても間違いではないのかも。そして、地球は宇宙空間に浮いているんだから、水はたしかに空に浮かんでいる。イメージとして、ほぼほぼ合ってるかも。

さつき、人間は一定することのない時空を旅する不安定な存在であると、かなり理屈っぽい話をしていたけど、いまの二つの詩でも、時間軸とか空間軸は絶対的なものではないということをいつてるんだよね。ということは、トバー君って、もしかしてアインシュタインより早くから相対性原理を唱えていたってこと

になるのかな？

㊦ 時間軸も空間軸も、そして物事の理解も、ただ一つの固定的で絶対的なものはないというのは荘子の哲学の中心テーマでした。

荘子は濠州のとある橋の上で友人の恵施けいしと問答を交わし、その場所だとされたところに観魚台かんぎょだいが設けられていて、そこで私は、先程予告した荘子の問答を織り込んだ詩を詠んでいます。その問答について、もしかすると前にもお話していて、繰り返しになるかも知れませんが、概略を紹介します。

荘子は石橋の上から、川を泳ぐ魚を見て言った。

「魚は楽しんでるなあ」

恵施は言った。

「君は魚ではない。魚の楽しみがわかるものか」

「君は僕ではない。僕に魚の楽しみがわからないと、君はどうしてわかるのかい」

「僕は君ではないから、君のことはわからない。君は魚ではないから、君は魚のことはわからない。全く同じだ」

「言葉でこねくりまわすのはやめて、根本に立ち返ろうではないか。君が『君は魚ではない。魚の楽しみがわかるものか』と言ったときに、君は実は魚の楽しみがわかっていて、そうだよ。僕が魚の楽しみがわかっていてもわかっていて、そうだよ。だから、どうしてわかるのだろうか、ふと君は知恵を働かせた。それで、君は言葉を紡いで、『君は魚ではない。だから魚の楽しみがわかるものか』という問いを構成した。そこから順にいまのやりとりになって、魚の楽し

みを知ったところからどんどん離れてしまった。その結果、君は魚の楽しみがわかって、かっていることまでもわからなくなってしまう。僕は橋に来たときに、君とはこうなるとわかっていたんだ」

——— どういうこと？ えーと、つまり、ことばを使い出すと、本当の理解からかえって遠ざかってしまうってことかな？ ことばというのは、人間にとつてとても強力な道具だから、そのために理解を誤るってことはありそうに思う。ことばを信用するなってことだよな。

だけど、ことばを信頼しなくて、真理は直観ないしは直感によつて得るといふのは、かなり危ういことだったりするんじゃないのかなあ。さつき難解なことをきらうつてという話をしたけど、直観ないしは直感第一主義だと、あさはかな「つ

ぶやき」にのってしまっただけってことになってしまったりするのかもね。反知性主義とかいうのにはそういうところがあつたりするんだらうね。

ん？ ことばには限界がある……それを超えようとするのが詩だつたりする？

㊦ 観魚台での私の詩です。

ごく些細な点にこだわって同じであるか異なるかを吟味したら、

隣り合う肝臓たんのうと胆嚢たんのうだって、楚国そと越国えつくらいに大違いということになるだらう。

万物は一つの理ことわりに帰るといふことがまことであるのなら、

今僕が魚の楽しみを知ったことを君は直ちに知るのである。

三句目は「万殊ばんしゆ 一理いちりに帰す」という、いかにも諺言風りげんふうの五文字を用いています。琴奨菊ことしょうぎくが大関に昇進したときに「万理ばんり一空いっくう」という言葉を使いました。それと共通するところがあるでしょうか。様々に異なる幾千万ものものも一つの原理から始まって、一つの原理に帰納されるという意味です。そのことが真理であるのなら、直観によつて真理を掴めるということを保証するのです。

——ん？ そうなの？ よくわかんないけど……こんなにぎやかな飲み屋で哲学的な考察を深めようたって、どうせムリなんだろうなあ。

ここでの結論としては、濠州の三つの詩は、いずれも常識的な見方を超えようとするようなところがあつたと、そんなところかな。

㊦ 旅は濠州から泗州ししゅうに至り、そこにある僧伽塔そうがとうで詩を詠みました。

唐の初めの頃に、西方の何国かこくというところで生まれた僧伽という人がいて、仏教を修めて中国にやって来ました。人々の信仰を集め、泗州のあたりで亡くなり、その後、淮河のほとりにあった仏塔の上に僧伽が姿を現し、人々が仰ぎ見ていろいろな願いをかけると、ことごとく叶えてくれるということがありました。以来、僧伽信仰が盛んになり、堂々とした僧伽塔が建立され、私が泗州を訪れたときには大きな建物を幾つも連ねる大寺院になっていました。

泗州に来たのはこのときが2度目で、これより5年前に、父と妻の亡骸を船に積んで故郷に帰る途中にも来ています。5年前には都から汴河べんがの流れに乗ってここに至り、今回は都から蔡河さいが、潁水、淮河を経てここに至りました。二つの道筋が泗州で一つに合わさったのです。

私はかつて南へと旅し、汴河のここに船を繋いだ。

逆風が吹くこと三日、砂が顔に当たり続けた。

船頭達が「一緒に祈って下さい」と勧めたので、

それに従って僧伽塔に赴いたところ、

供えた香の火が消えないうちに、

帆柱に掛けてあった吹き流しの向きが早くも変わった。

船に乗り込み、わずかの間に、

振り返ると、泗州の長橋ちようきやうはもう見えなくなっていた。

そして亀山かみさんの下に着いたのはまだ朝飯前だった。

そのときは、私の願いを叶えてくれたと喜んだのが、

思えば、道を窮めた至人は無心しじんであるのだから、

誰かに厚く報い、誰かには薄くということはないはずだ。

田植への時は人は雨を望み、稲刈りの時は晴れを望む。

行く人は追い風を喜び、来る人は向かい風を恨む。

もしも人それぞれの祈りを全て遂げようとしたなら、

造物主ぞうぶつしゅはあれもこれもと一日に千回も変化しなければならぬだろう。

今私は世の趨勢から遠くにこの身を置いて、

去るものを追うことも、来るものを恋い慕うこともない。

僧伽塔から先へと進むのはもとより願うところ、

しかし、留まるのも悪くはない。

ここに来る者があることに願いをかけられたのでは、

さすがの神だってうんざりであろう。

唐の澄観ちようかんが嘗んだ塔を、

韓愈かんゆは高さ三百尺と詩に詠んだけれど、

当時と今とでは姿が変わっている。

神の靈験を信じようとしない俗物の私を嫌って、

塔の階段を昇らせてくれないということでなければ、

雲を載せた山が淮河の左右を取り巻く景色を一目見るとしよう。

——ここでも、ものの見方は相対的なものだということを詠んでいるんだね。ボクも大学受験のときに、鎌倉の天神さんに行って祈ったりしたけど、だれかが合格すればだれかがそのためにはみ出て不合格になるんで、天神さんも全員の願

を叶えられつこないよなあなんて思ったよ。それはわかっているでも祈るんだけ
さ。

なんとなくわかってきたけど、都であれだけがんばって改革に反対したけれど、
それも虚しく都を追い出されて、人の運命とか、歴史の必然性とか、心の持ちよ
うとか、旅の間にいろいろと哲学的なことを考えていたってことが、詩に詠まれ
ているんだね。弟さんに日に3度反省するっていったことを、実践していたって
ことかな。

① 次は、いまの詩で朝飯前に着いたと詠んだきびん亀山での詩です。

我が生はゆらりゆらりと揺らぐばかり——

どこに行き、何を求めようというのか。

再び亀山の前に来るまでの間に、

五年の歳月が流れ、

万里を旅し、天下の半分ほども巡っただろうか。

亀山に庵を営む僧は、

ひたすらここで寝起きをして老齢に至った。

都はすでに遠く北に地を隔てるところにまで来て、

私はなおも海に連なる潮に乗って、

東へ東へと游たびを続けなければならない。

六百年余りの昔、

南朝の皇帝は北朝の侵攻を防ごうと、

ここに砦を築いたという。

そのことを今誰が知り、

砦の崩れ去った址はどこにあるのだろうか。

——これも哲学的な反省かな。庵でずっと寝起きしていた僧と、天下をひとまわりしたトバー君と、どちらが有意義な時間を過ごしたのかと、あらわにいつてはいないけれど、そういうことを思ったりしたんだよね。

いまでは海外に行くのがあたりまえ、海外で活躍している人がいっぱいいて、日本のちっぽけな町でじっとしていて、これといって人に話せるようなこともなく過ごしていると、なんか取り残されているような感覚になったりすることもあるんだけど、内面の充実みたいなことが実は大切なのではないかと、そういうこ

とかな？

① 淮河が長江に合流するあたりは低湿で、現在の地図を見ていただいても多数の湖沼が存在し、大昔はどこもかしこも水が溢れているような状態でした。中でもこったくこ洪沢湖というのが大きな湖で、私はそこで一晩停泊し、翌朝出帆したところ、激しい向かい風に遭い、やむをえず引き返しました。

風と波がたちまちこのようになっては、

私の旅の行く末は一体どうなることやら。

とりあえずは、帆を掲げて西に戻るしかあるまい。

そう決めたのは悪い選択ではなかった。

洪沢湖までの三十里は飛ぶが如く――

我が船が帰って来たのを見て、

「難儀でござりましたなあ」

土地の人々が親しく労ってくれ、

酒を携えて売りに来てくれる者もいる。

この人情の温かさは変わらずにあつてほしいものだ。

酒を飲んで一眠りするとすでに夜半、

川岸の風の音は静かになりつつある。

ならば、明日はきつと淮陰県わいいんにまで行けるだろう。

そこの市場に、名産の肥えた白魚しらうおが出ているに違いない。

我が行たぎはもとより南も北もなく、

たまたま意に適ったところが行きたかったところなのだ。

波が澎湃ほうはいと押し寄せ、船の窓を終夜揺らしたところで、

心配することは何もない。

妻や子等にも憂いの様子はない。

さしあたり質しちに入れられる衣類がまだ箱にあるのだから。

——これまでの詩より、ちよつとだけ生活臭が出てきたかも。風任せの人生でいいんだと、哲学的思索を展開しても、人間は食わずには生きていけないから、トバー君としては、さしあたってはお上の指示に従って赴任して、仕事をしないといけないんだよね。それもあかんとなったら、衣類を質に入れる手もあるってことか。

えーと、船が停泊すると、村人がいろいろなものを売りにくるといふ情景は前にも聞いたような気がする。人情の温かさっていうけど、トバー君が気前よく買ってくれたりするんだったら、そりゃあ喜んで寄ってくるよね。詩としては、ちよっと美化したってことかな。

㊦ 翌日は、風に吹き戻された分を取り戻そうと、夜も船を繋がずに、淮陰県さんようから山陽県さんように向かって進み続けました。それは10月16日のこと、晴れば丸い大きな月が煌々こうこうと照り輝くころでした。

風が空高くを吹き、月は暗く曇り、雲も水も黄色味を帯びている。

淮陰を夜に発ち、山陽に着いたのはその翌朝。

細かい雨のような暁の霧が漂い、

朝日が出て光は弱く寒々しい。

霧が巻き上がって雲の内に収まったのはすでに正午の頃、

北からの冷たい風が、人を押し倒さんばかりに吹き出し、

たちまち窓にはらばらと音がして電が落ちて来た。

突然のことに人々は避ける間もなく、

市場はひっくり返るような騒ぎで、

売り物があちらこちらに乱れ飛ぶ。

そこに雷が、壁を崩さんばかりに一発鳴り響き、

それで事が終わった。

「今夜一杯いかがでしょうか」

県知事さんからのお迎えが呼びに来てくれて、

宴席の座が定まると、

折よく夕日が射し込んで廊下を明るく照らし出す。

百種の変異、怪異もすっかり消え去って、

全てが夢ではなかったかと疑われる。

人々は言う。

「竜が古びた穴に飽きて、全部の魚を引き連れて移って行ったのでありませんよう」

それは何の兆しなのか、黒か白かと論じ合うのだが、

我等愚かな儒者は揃いも揃って無知であるから、

經典の文句を好き勝手に引用して言い募るだけである。

その中で、ただ県知事の言葉だけは用いるべき価値がある。

「寒くなり、雪が降るようなこの天気には、

まさしく何もよりも酒がよいとの徴しるしでありましような」

——もしかして、「経典の文句を引用して言い募るだけ」というのは、当時の学問のあり方に対する皮肉だったりする？ 科挙の試験問題って、なんかそういうものであったらしい……。

㊦ かくて我が旅は揚州ようしゅう、昔の名で広陵こうりょうに至りました。広陵は、隋ずいの煬帝ようだいがとり

わけ好んだことで知られ、長安から豪華船に乗ったまま広陵に行けるよう大運河を造らせたとも言われています。北方生まれの煬帝にとって、広陵は憧れのハワ

イのようなどころであったのでしよう。

宋の時代の揚州は屈指の大都會で、人が多く集まるところには旧知の仲間もいるということ、私が到着すると、州知事の銭公輔せんこうほは私と気の合う3人を呼び集めてくれました。その3人に一首ずつ贈った詩を聞いていただきましょう。

最初は劉放りゅうほうです。前々回だったでしょう、まだ私が都にいたときに、旅立つ劉放を見送ったときの詩を紹介していますが……ああ、そうでした、そのときは煩瑣はんさになるのを避けて劉放の名は出さなかったのです(第14回)。今回の詩と関係するのでもう1回聞いていただきましょう。

貴公は知っているだろう、

げんせき阮籍が人の良し悪しを決して口にしなかったのを。

吾輩には舌があり、硬い歯があると、誇ってはいけない。

舌や歯は、旨い酒を飲むためだけに使うのがよい。

書物なんぞはたくさん読まないのがよい、

詩なんぞは巧みでないのがよい。

貴公がこれから行く海辺の地は何もないところだ。

毎日毎日酒に酔っていればよい。

間違っても夢に朝廷を見たりしないのがよい。

私は来るべき春の味覚を貴公と楽しみたいと思っていた。

しかし、昨夜、庭の木に秋風を感じたばかりであるのに、

貴公はもう遠くに行ってしまうのだ。

貴公は行ってしまっっていつ帰るのか。

貴公が植えた桃の木に花が咲くのはいつの春なのか。

すっかり白髪になったしまった貴公が、

その花を愛でることになるのだろうか。

この私こそが「吾輩には舌がある」と、傲然と改革批判を続けたあげくに追放されてしまいましたので、劉放に再び会って、どのような詩を贈ったのかという
と……

去る年に都で貴公を見送った際に、

貴公と私の酔っての言葉は、

人々を驚かせたものだった。

今や二人とも漂泊の身となり、

筆硯の世界に遊ぶのもままならない。

我が命運は天の定めによるのであろうか。

いにしへ

古の弓の達人も己の技だけで必ず的を射抜いたのではなかったと聞く。

詩を作って思いを晴らそうとしても、

そし

誹りの声が物憂くてならない年齢になってしまったようだ。

孔子は、若い者はとかく雄弁を誇りたがると、

口先ばかりが達者な弟子を常に叱っていた。

矢で一度翼を傷付けられた鳥は、

飛ぼうとしても前の痛みを念ってしまふという。

広陵で貴公とこうして三日飲み続け、

全てが夢のように思えて来る。

誉れ高き州知事のもので、

良い酒を酌んで早くも春の心地がすればなおさらだ。

互いに手を振って入り江で別れる時が来て、

羨ましく思うのは、

貴公が都を去って以来ここで安閑としていること。

私が行く杭州は、どうも何かと騒がしいらしい……

最後の句は、旅も後半になり、新しい任地に着いてからのことが気になって来たということ。聞くところでは、新法が施行されて以来、杭州ではなかなか問題があるようでありました。

——そうだね、夏休みも半分を過ぎると、終わりを気にしなくてはならなくなつて、ユーツになつたりするもんな。

詩の前半はいろいろ故事を用いたりしてごちゃごちゃしているけど、それは単純には整理できないトーパー君の本心をのぞかせているってことなのかな。

㊦ 次は孫洙そんじゆという人。劉攽は、阮籍のように黙っているのがいいと、私でさえ

忠告せずにはいられなかったような人でしたが、対照的に孫洙は無口で、それだけに内に溜め込むタイプでありました。

三年の間、私は都にいて、

その時の憔悴ぶりときたら、

今思うと、言いようがないくらいだ。

都の街路に舞う塵の中でびっしりと汗をかき、

ふらふらと馬の歩みに任せるばかりのこともあった。

人というものは付き合いの良さをとかく貴ぶので、

少しばかり同調しないだけでも恨みを生じてしまう。

昔からの友人でさえ、

私には近付かないようになってしまった。

南に来て、気持ちには実にからりとして、

ただ一緒に語る相手がないのを残念に思っていた。

広陵の町で、こうして劉君や孫君に会えるとは、

思いがけないことであった。

仲間のように見えても、

いささか趣おもむきが異なれば一緒にはいにくいもので、

例えばオランウータンとチンパンジーはそうなのだろう。

我々のここでの集いを長く続けると、

疑われて排斥されることになりかねないのを恐れる。

私は偏屈であるが、貴公にはこだわるところがない。

違いはあっても、交わりを断つということにはならない。

私はさらに南東に向かうけれど、

ほんのしばらく貴公と離れるだけのことである。

——えーと、オランウータンとチンパンジーってどういうこと？ 地球の裏側と同じく、メツチャ意識だよね。

㊦ 原文では王孫おうそんと猿えんです。王孫とは猴こうの別名で、猴もサル仲間ですが、その性質はおとなしく、一方で猿えんの性質はさわがしく、猴こうと猿えんは同じ山にはいられません。すでにおわかりの通りに、改革派と非改革派は一緒にはいられないという譬えです。

——同調しないでだけで恨みを生じるってあたりの原文はどうなってるの？ ボクもそういうことは経験豊富なので。

㊦ 負の面において普遍性があるというのは寂しいところですが――

人情貴往返（人情 往返を貴おうへんぶ）

不報生禍根（報いざれば禍根を生ず）

仲間内で頻繁に親密さを確認し合わないと、怨みのもとになるということです。

――まるつきりいまと同じじゃん！ ボクがいまごろ高校生だったら、スマホをへし折ったりしたかもね。

㊦ 次は劉摯りゅうしという人です。今の詩で劉君と言っていたのは、2人の劉君のこと

でありました。

ここ広陵でかつて会ったときは、

貴公は地域の重要な職務を勤めていた。

二度目に皇城で会ったときは、

貴公は堂々とした高官の衣服を身に付けていた。

そして三度目に会った今の貴君は、

都落ちの境遇にある。

朝には、雲の峰の高いところにあつて、

宰相と席を一つにするほどであったのに、

暮れには、水のほとりに追いやられてしまったのだ。

しかし、貴公は喜びも怒りも見せることなく、

真に「できる人」と言うべきである。

士^したる者は、

元来田園に在るべきであって、

世に出て用いられようとするの大いに誤るものなのだ。

まじないに使う草で編んだ犬を見るがいい。

草の犬は飾り立てられていい気になっているようだが、

まじないが終わってしまえば道ばたに捨てられ、

人々に踏みにじられるのである。

さあ、もう年の暮れは近い。

故郷に帰って耕作を始めるによい時期である。

「できる人」の原文は「可人^{かじん}」で、見る可^べきところのある人、取る可^べきところのある人ということです。劉摯は確かに才能が外に溢れ出る「可人」でありました。それだけに、今は喜びも怒りも見せることなく過^かごしているようでも、いずれまた大きな摩擦を生じかねないだろうと、田園に帰ることを提言したのです。それは自分に向けての言葉でもありました。

揚州を出ますとすぐに長江で、11月の初旬に川を渡り、南岸の鎮江^{ちんこう}に到着しました。鎮江には、鎮江三山といわれる史上名高い名勝があり、私はこの三つの山を順に登って山ごとに一つの詩を詠みました。

——日本百名山とか四国八十八カ所とかナントカ七福神とか、数がそろっている

と、全部に行ってしまったくなるっていう心理が働くよね。でも、三つの山を登るのって大変じゃなかった？

① 鎮江三山は現在の中国において、最高ランクの国家AAAAA級旅游景区に

指定され、中国を代表する景観地の一つになっています。三山とは、金山、きんざん 焦山、しやうざん

ほくこざん 北固山で、私はこの順に登りました。いかに大変だったかというと、三山の標高は、それぞれ海拔44メートル、71メートル、55メートルです。

——なんだあ、史上名高い名勝とかいうから、少なくとも大山や箱根くらいかな
と思ったんだけど、最高で71メートルじゃ、小出山脈並みじゃん。それだった
ら、三つでも五つでも楽勝だよな。

㊦ では、金山の詩から。金山は当時は水の流れの中に聳えていて、船で渡りました。

我が家があるのは、

長江の水が初めて源を発するあたり——

官界に遊ぶ身となり、

長江の水が海に入るのを見送るようにしてここにまで来た。

聞くところでは、

海からの潮が遡るときには高さが一丈ほどにもなるという。

冬の今は川の水位が下がっているので、

砂の上に流れの痕跡が認められるだけだ。

天下第一の名水とされる中冷泉ちやうれいせんがあり、

その南側が石盤で囲まれているのは、

昔から波濤に従って見えたり見えなかったりしている。

金山の絶頂に登り、

試みに郷里の方角を見る。

長江の南側も長江の北側も、

ただ青い山が連なっている。

旅愁に駆られ、

夜になるのを恐れて陸に帰る船を尋ねる。

山の僧は、

「せっかくですから、落日を御覧なさいませ」とねんごろに引き留める。

日が長江の彼方へと沈み行くと、わずかな風によって、

皮革の皺のような細かな波模様が、

何キロにもわたって広がる。

空には、無数の千切れ雲が、

魚の尾のように赤く染まる。

細い新月に薄暗い魄かげが伴い、

その月もじきに落ちてしまうと、

天は漆黒の闇となる。

その時に、

長江の中央に松明たいまつのような明るい何かが生じる。

飛ぶばかりの焰が山を照らし、鳥を驚かせる。

寺に戻って床に伏せると、

あの火が何であったのか、

心に納得できるものがなく、

思案の余り嘆息する。

鬼が為したのではなく、

人が為したのではなく、

ついに何物であるのか。

金山より見る川と山はこのようであるのに、

自分は郷里の眉山びざんに帰ろうとしていない。

だから、長江の神が異変を示して、

自分の頑かたくなな心を驚かせようとしたのだろうか。

ならば、私は江かわの神に謝ろう。

「ただ食うためにやむをえずこうしているのです。

暮らすに足りるだけの田がありながら、

もしも帰らないでいるとしたら、

誓って、長江の水を全部飲み干してみせましょう」

——故郷の田園に帰るのがよいということが、一つのテーマとしてずっとあるみたいだね。でも官僚としてやるべきことがあると、思っていたんだよね。それを

「食うためにやむをえず」と、ちよつとカツコ付けていったわけだ。

それで、飛ぶような焰って、いったいどういふものだったの？ ホントにみたの？

㊦ これは見たままを詩に詠みました。正体は全く不明です。漁をする船の火ではないのは確かです。発光するプランクトンの類だったのかも知れません。

——何かしらいつもと変わったことがあって、それが自分に対して何かを暗示しているのではないのかって思うのって、よくあたりするよね。夜勤の日に、昼間のうちはいい天気だったのに、ちよつと出勤しようとしたら雨が降ってきたりすると、今夜はなんかよくないことがあるかもって、気が重くなったりする。そ

して、たまたまナスコールがビービー鳴って、面倒なことが続いたりすると、「やっぱりなあ」って思うんだよね。だけど、ボクのためにわざわざ雨を降らせるようなことは絶対はないっていうのは、この生シラスがいずれクジラに成長したりしないってこと以上に確かなんだけどね。

㊦ 最後の誓いの言葉は、わかりやすいように「長江の水を全部飲み干してみせます」と訳しましたけれど、原文では「江水こうすいの如し」です。川の水はあくまでも川の水であって他の何物でもないように、自分の言うこともそのまま真実であると言った意味合いになるでしょうか。

もう一つ説明を加えますと、月に薄暗い「魄かけ」を伴うとした「魄はく」というのは、月が細いときに、光っている部分の他に、ぼんやり暗く見える「陰かげ」の部分のこ

とです。

——それって、地球に反射した太陽光で照らされているんだよね。昔の人はそういうメカニズムがわかっていなかっただろうから、不思議な感じがしたのかな。

㊦ 金山に泊まったのは11月3日、陰曆ですから、ちょうど三日月ということ
で、「魄」の部分が目立ったのでした。

その翌日に金山から船で渡って焦山に登りました。

金山の楼観は堂々として奥深く、

鐘を撞き、太鼓を打つと、

向こう岸の淮河南方一帯に響きわたる。

私は金山に泊まり、

ここまで来ていながら焦山に行かないのでは、

我が心に恥じねばならぬと思うようになり、

焦山には何があるのかと尋ねた。

「そうですね、立派な竹がありましたよ。」

それと、薪を採ったり、水を汲んだりする僧が二、三人ばかりいましたよ。」

しかし、雲から土でも降りかねないようなこの空模様、

しかも川波が高くて、

船で焦山に渡る者など誰もおりません。

せいぜい川べりなりわいで生業を営む人々が、

春の蚕がよく育つようと祈りに行くくらいでありましようかなあ」
それを聞いて、

一緒に金山に遊んだ人々は、

もうここだけで十分だと言ったのだが、

ならば、私だけでも行こうと決意したのだった。

お上の勤めを為して、その報いがあるうがなかるうが、

川を渡り湖を渡る労を断じて厭うものではない。

まして自分で行きたいと思うところなのだ。

朝、私は船を雇い、金山を発った。

風はなく、自ずから波が湧いて、我が船を後押ししてくれる。

流れの中ほどで船歌が湧き、

酔ったような心持でその声を聞く。

山から老いた僧が一人下って来て、

「なんとまあ、こんな日に、客人が来られましたわい」

驚きつつ出迎えてくれる。

老僧と話すうちに、笑って喜び合うのは、

いつの間にか二人とも郷里のなまりになっていることだ。

老僧は言う。

「久しくここではみろくぼさつ弥勒菩薩様とだけ一緒に過ごし、

郷里のことなどすっかり忘れておりました」

腹がくちくなるほどではなくとも、

もてなしてくれた山の食べ物は旨く、

紙を突っ掛けただけの夜具でも、

疲れていたので暖かくぐっすり眠れる。

かくして別れの朝に、私は老僧に言う。

「山林に生きて飢えに苦しむのは昔からありましょう。

田がないから身を退くことができないとの言い訳をして、

実のところは俸禄を貪るような人間ではないと思っております。

その昔、三回左遷させられ、ついに職を辞した人がいましたけれど、

その回数には、私はまだ達していません。

その昔、七つの耐えられないことを挙げて職を辞した人がいましたけれど、

それくらいの数なら、私にはもうすでにあります。

行く行くは官服を自ら脱ぐ時がきつと来るでしょう。

どうか私のために、

庵を立てるによい場所をこの山の中に残しておいて下さい」

——また引退について口にして、いつものが出たあつて感じ……。トバー君つて、いつつも引退することを考えてたみたいだけど、それつて本気だったの？ カッコだけ？ もしかすると、クラシック音楽で、「ジャジャーン」とかつて、いかにも「ハイ！ 終わりです！」つて感じの音で結んだりするけど、詩をいい感じに終わらせる手慣れたツールとして引退を使っていたりした？

「起承転結」つて、漢詩から出たことばだったよね。その「結」のところ、落語でいうとオチの一つのパターンとして引退を頻繁に使ったつてことかな？ つまり「引退オチ」つてこと。そう思うと、「哲学オチ」「自虐オチ」「呼びかけオチ」

「宣言オチ」「ユーモアオチ」……いろいろありそうだね。

㊦ 自分ではあまり気にかけていなかったですが、言われてみると、「引退オチ」の例は数多くありそうです。

とすると、次の詩などは、さしずめ「史談オチしだん」と言ったらよろしいでしょう。北固山にある甘露寺かんろじを訪ねた詩です。焦山には一人で渡ったのですが、そのときの反省で、北固山には同行してくれる人を求めました。

長江があつて、山もあるのなら、

結構でなかるうはずがない。

好風景であるだけに、一人だけで遊ぶとなると、

気持ちか昂ぶり過ぎてしまいかねない。

ともに行く人がいるのがよいだろう。

必ずしも平素から歓びを共有する相手でなくともよい。

甘露寺に行こうとして、

官職に就いている方々には暇を持って余している人がなく、

面識のない二人ではあつたけれど、

喜んで鞍を並べて北固山に向かうことになった。

古い歴史のあるこの山は、

そのまま一つの城のようになっていて、

階段が層を成して山を巡り、

朱色の欄干がぐるぐる巻きになっている。

その先端で大地が窮まって断崖となり、

その上に楼台が立ち、

楼台の尖端の一点の上から大空が広がり、

空の下に水が広がっている。

楼台から一覽するなら、

数州を呑むばかり、

山が長く連なり、漫漫と川が流れる。

対岸を望み見ると、

靄の彼方にぼんやりと竿のようなものがあるのは大明寺だいめいじであろうか。

甘露寺の庭には、

羊が伏すような弓なりの岩がある。

ここでかつて劉備りゅうびと孫権そんけんが会ったという――

遙かにそのときに、

しよかつこうめい

諸葛孔明は策を胸に劉備を助け、

たった一言用いただけで孫権を納得させ、

二言用いただけで曹操そうそうを敗走させた。

諸葛孔明の名は高く、

心に想わせるものは多くとも、

事はすでに去り行き、

目に見える形で留まっているものはない。

巨大な二つの鉄の釜かまがあり、

りやう
これは梁の武帝びが寄進したものだという。

ひやくこく
百斛もの水を湛えて、皇帝の威信を示した物も、

長年の雨にさらされて錆びて腐りかけ、

虚しく向き合っているだけである。

周代の巨大な青銅の鼎かなえも川に沈み、

漢代の巨大な銅の盤さんも土に埋もれ、

山や川でささえもとの形態を失っているのに、

甘露寺のこの鉄の釜ばかりがなぜ今も残っているのだろうか。

まだ詩の途中ですが、ここまででいくつか説明が必要でしょうか。三国時代の劉備や諸葛孔明はご存知だったですよ。

——まあね。諸葛孔明にちよつと批判的な詩を聞かせてもらったしね。

㊦ そうだったですね。しかし、梁の武帝、周代の鼎、漢代の盤はわからないですよね。

——そうだけど、こまごました説明はなくてもいいかも。何かしら由来があるらしいってことで、とりあえずはいいんじゃないのかなあ。

㊦ 甘露寺には、博物館のように歴史的な遺品が多数所蔵されていて、晋しんの張僧繇ちやうそうようが描いた菩薩の画、南斉なんせいの陸探微りくたんびが描いた猿の画、唐の李徳裕りどくゆうの肖像画といったものを見た感想を、このあと20句にわたって詠んでいます。私としては

それなりに工夫を凝らしたところではありますが、あなたの興味を引くとは思えないので、おっしゃる通り、「とりあえずはいいんじゃないのかなあ」ということで省くことにします。

こうして甘露寺の所蔵物をいろいろと見た上で、特に諸葛孔明、孫権、梁の武帝、唐の李徳裕の4人は英雄だとして、「史談オチ」へと進みます。

四人の英雄は皆竜であり虎であって、

その残した痕は今もくっきりと残っている。

四人が活躍した時代は争奪を専らとして、

安んじられるときは少しもなかった。

興廃は造物主の手の内にあつて、

世の移り変わりについて、

誰かがおごなりに言えるようなことはない。

昔も今も大きな法則は変わらない。

ところが、凡庸な者に限って、

難しい事を為そうとする。

昔の英雄に遥かに及ばない後世の凡人は、

いたずら
徒に辛酸を嘗めるばかりである。

いにしえ
古の琴の名手は、

久遠の時間の推移を想わせて人を泣かせたという。

その音を聞かずとも、

かつて阮籍が無限の思いを込めて、

「もはや英雄はいない」

と叫んだのに声を合わせて、

私は深く慨嘆せずにはいられない。

——えーと、いまのオチはどういうこと？ これはさすがに説明してもらわないと、さっぱりさつちやんだね。阮籍の名はさつきも出ていて、少しは耳になじんでいて、なんとなくわからなくはないけど。歴史の背景がまるつきりわかっていないボクなんかには、「史談オチ」は「馬の耳に小判」「猫に念仏」「阮籍に弦齋げんさいカレーパン」だね。

㊦ 最後は何のことですか？ それこそ説明が……。

——いやいや、単なる語呂合わせなんで……瞬時にくだらないと思ってくれたら、それでいんで。トバー君の「史談オチ」も、瞬時に理解できなくて、説明してもらってから、「へーえ、そうなんだ」とか、微妙な顔で感心したフリをされても、気の抜けたビールをつがれたみたいにくれしくないだろうね。でも、あえて質問すると、「英雄がいない」と叫んだっていうのはどういふこと？」

㊦ そかん 楚漢戦争というのを聞いたことがあるでしょうか。秦しんの始皇帝の暴政によつ

て鬱積した民衆の怒りや恨みが、始皇帝が死ぬとすぐに爆発し、それで秦が亡びますと、その後の天下を楚ちゆうせきの項籍と漢りゅうほうの劉邦が争いました。阮籍は、楚と漢が争った古戦場に立ち、「もはや英雄はいない。小人物どもが名を成している」と叫び

ました。英雄とは何か、その捉え方は時代によっても様々に異なるでしょうけれど、阮籍は小人物どもが跋扈する時代は生きるに耐えられないと嘆いたのです。

——昔はよかったというのは、どの時代にもある年寄りのお定まりの嘆きなんだろうけど……さすがにボクはまだ年寄りになったとは思ってはいないけど、それでもこれは昔のほうがよかったに違いないって思うことがある。だって、現在の日本では、反比例の法則がしつかりと成り立っているということが、日々証明されているんだもの。つまり、地位が高くなればなるほど人間が小さく不誠実になるってこと。だって、唯一日大の学生だけがまともなんだよなあ。いくらなんでも、こんなことは昔はなかったろうからね。

えーと、前回だったよね、トバー君は、円熟した人々に自分は会えたけど、

いまやその人達も自分も老いてしまったといってたよね。そのところが、「もはや英雄はいない」という阮籍の叫びと共通するってことなんだね。

㊦

私がこの詩で想ったところの英雄は、項羽や劉邦といった、いかにも英雄と

いうイメージにぴったりの人々ではなく、はんちゅうえん 范仲淹や欧陽脩のような人々です。何

度もお話して来ましたように、宋がそれ以前の王朝に比べて画期的であったのは、科挙の制度によって、以前なら野に埋もれたまま一生を終えなければならなかったような人達が大大的に起用されたことでした。科挙の合格者は単に試験の成績がよかつただけではなく、実際に優れた仕事をしましたので、国は科挙の合格者を続々と宰相以下の要職に就け、若者はそれに続こうと勉強に励み、己を磨き、より優れた人が国家の中枢に集まるようになりました。その好循環の所以を端的

に言い表わしたのが「手本は范仲淹」です。「天下の憂いに先立ちて憂い、天下の楽しみに後れて楽しむ」——士大夫はこうあらねばならないと范仲淹は言い、実践しました。「天下の憂いに先立ちて憂う」とは、今何が問題であるかを明らかにして、解決策を提示し、それを実行するということで、范仲淹はいかなる障壁があってもそれを成し遂げようとなりました。

范仲淹よりも35年先輩の王禹偁おううしやうという人がいました。王禹偁は宋代型の英雄の先鞭で、己の思うところを何憚ることなく主張し、いかなる攻撃にも決して怯まず、その剛直さは范仲淹以上でした。王禹偁は農家の出身で、30歳で科挙に合格し、32歳のときに蘇州そしやうに赴任しました。

私は鎮江三山を巡った後、長江以南の地、いわゆる「江南」こゆうなんに初めて入り、江南の代表的な都市の一つである蘇州に立ち寄り、虎丘寺こきやうじに遺されていた王禹偁の

肖像画を見ました。画かれていたのは若き日の王禹偁、そのときの私とほぼ同年齢であつたのですが、その眼差しの鋭さに、体が震えるほどの強い衝撃を受けました。この人にはとても及びもつかない、この私も、「もはや英雄はいない、小人物どもばかり」と言う「小人物」の一人に過ぎないのではないかと……。

——眼差しの鋭さかあ。いまのトバー君は、一見すると柔和なおじさん、もつという、ただのむさいおっさんだったりするんだけど、ときどき、ホントは厳しい顔をしていたんだろうなあって、はつと思わせるところがなくもない……。肖像画って、だいたい理想化して描くものだよ。いまのトバー君だって、肖像画に描いたら、かなりいい感じになつたりするんじゃないかなあ。これって、ほめたのか、けなしたのか、わかんないね。

㊦ 王禹偁は蘇州での実績を高く評価されて中央に呼ばれ、すぐに朝廷の要職に就きました。38歳のときに、皇帝にとって不都合なある事実について、誰もが忖度して黙っていたのを、あからさまに批判したために皇帝の逆鱗に触れ、地方に流されました。それから2年して、王禹偁の剛直ぶりをなつかしく思った皇帝に呼び戻され、しかしまたすぐに怒らせてしまい、じよしやう 滁州に流されました。滁州は覚えていただけますか。欧陽脩がやはり2度目の左遷で追いやられ「すいおうてい 醉翁亭の記」を書いたのが滁州でした（㊦ 第15回）。滁州にも王禹偁の肖像画があり、欧陽脩はそれ見て詩を詠んでいます。

——へーえ、滁州って、気に入らない人物を流したくなる、なんかいやな感じの

土地柄だったりしたの？ そんなふうな土地だと認定されたら、地元の人はいやだね。

㊦ 『醉翁亭の記』にありましたように、滁州は山に囲まれ、辺鄙な土地であるとのイメージがあり、それでも都からは比較的近いので、ひとまず流して反省させる場所として適当であると思われるのでしよう。滁州くらいでは生ぬるいとなると、さらに遠くに流されるということにもなったりもします。

歐陽脩の詩を聞いていただきましょう。

私は偶然にもここに来たために、

王禹偁の事跡を継ぐようなことになった。

かつてあったと聞くことが、そっくりそのまま今にもある。

昔も今も、諸々の県はどこも豊作であるから、

公務は暇である。

昔も今も、どの家も暖かく暮らし腹が満ちているから、

皇帝の御恩を思っている。

王禹偁の画を見ると、

まざまざと今ここにいるかのようだ。

我が文章を顧みると、

全くもって論じるに足りない。

王禹偁の名声は歴史に光り輝いているのに、

壁に掛けられたその容貌は塵によってくすむにまかされている。

——欧陽脩は滁州に偶然きたわけではないんだよね。公務が暇だとか、皇帝の恩を思うとかいってんのは、そのままの意味ですなおに受け止めてはいけないうらね。そして、画がくすんでいるというのは、王禹偁の志を継ぐ者がいないという意味なんだろうね。だから自分がと、そういう決意を示したってことかな。

㊦ 完璧な解釈です。欧陽脩も私も、王禹偁の画を見て、士大夫のあるべき姿を思つて、身を引き締め直したわけですが、王禹偁は詩や文章に関しても、欧陽脩の文学革新運動の先駆けをなし、当時流行の飾り付けを重んじた文体には目もくれませんでした。

ここで王禹偁の詩文もいくつか紹介したいところですが、滁州で詠んだ詩を一

つだけ聞いていただきましょうか。

滁州の民俗は、

いわゆる楚ふの風ふうであろう。

口からついて出るのは、

下俚かりなまりとか巴はなまりとかいうものであるう。

良く稔ねって安楽あんらくだった年のあとに、

春を迎えると、

人々は思う存分に歌い踊る。

肘と肘をくっつけ、

輪りんになってぐるぐる回り、

首と首とを一つに集め、

林のように突っ立ったりする。

男も女も一緒に歌い、

その詞にみだらなところはない。

都から文化が浸透して来ても、

このように歌い踊るのは変わらなかったし、

このままであってほしい。

この歌は四面楚歌しめんそかにいうところの楚歌なのだろうか。

戦場に楚歌を流して戦争を終わらせた古いにしえの人の知恵の深さを思う。

それで知るのは、

国の一大事の成るか成らぬかは、

民衆の心を掴んでいるか否かにあるのだ。

——これももしかして「史談オチ」？ 理屈っぽい「哲学オチ」かな。そういうところがトバー君の詩に似ているかも。

㊦ 先程、楚漢戦争の話をしました。楚の項籍と漢の劉邦が争い、最初は項籍が優勢であったのですが、最後は劉邦が項籍をその本拠地近くへと追い詰めました。ある夜、項籍は自分を包囲する敵陣から楚の歌が流れて来るのを聞き、自分は故郷の人々にも見放されたと、敗北を悟ったのでした。それが四面楚歌の故事です。王禹偁は民衆が歌い踊るのを見ながら、最後の決戦を前に、戦場に楚歌を流したことで戦争の終結を早めたと、古の人々の知恵を思ったのでした。

——いまのこの詩と、『醉翁亭の記』とは、土地の人々と喜びを一つにしようということで共通するところがあるみたいだね。それは王禹偁の志を継ぐということだったんだね。

㊦ 王禹偁は滁州に流された後は地方官としての勤めをしばらく続け、その間に皇帝が代替わりし、新皇帝に召されて中央に復帰しました。ところが、懲りないと言いか、信念の人と言いか、わずか1年余りでまたまた流されてしまいました。足掛け8年で二度も左遷の憂き目にあったのです。そして、それから3年ほどして、「あの厳しい声がないと朝廷は引き締まらない」と、皇帝は王禹偁を思い出して呼び寄せようとしたのですが、そのときはすでに亡くなっていました。まだ4

8歳でした。

話を戻しますと、私は蘇州で王禹偁の肖像画を見たわけですが、それから7年後に、ある事情からその画賛および序文を作りました。それを聞いていただくと思います。これも「史談オチ」に分類されるものなので、少しばかり説明を織り込んで訳します。名前を列挙しているところがありますが、先程と同様にいちいち解説するとかなりうるさくなるので、そういう名の人がいたらしいと思っただけでよろしいかと思えます。「公」と言っているのは王禹偁のことです。

魯の文公の十二（紀元前615）年、新興国の秦からの使者を迎えた魯の公子遂は、その使者が礼節を十分にわきまえているのを見て、

『君子がいないと国は成り立たない』と言いますが、秦はすでに立派な国になっ

ています」

と、秦を対等の相手として認めた。

しゅんじゅうさしでん

私は『春秋左氏伝』に記されている「君子がいないと国は成り立たない」という

この言葉を唱えて、三度目に至ると、涙を流して大きく嘆息しないではいられない。

きりゅうあん

しゅうぼうし

りこ

ごちやうしやう

ぎちやう

てきじんけつ

君子とはどのような人か。漢代の汲黯、蕭望之、李固、呉張昭、唐代の魏徵、狄仁傑

は、皆身をもって義がどこにあるかを示し、仲間に引き入れようとする者がいて

も近寄らず、排撃して去らせようとする者があっても動かず、毅然とした姿で朝

廷に立ち、大悪人と小悪人どもが互いに相手を潰し合うようにさせ、禍が形にな

らないうちに消し去り、国が亡びるような危機になる前に救ったのだった。それ

と似て非なるのは公孫弘、張禹、胡広といった連中で、弁を弄して皇帝に迎合す

こうそんこう

ちやうう

ここう

るだけで、百千の議論を重ねたところで、国家の緩急に役立つことは何一つとしてなかったのだった。

公は雄渾な文章、真っ直ぐな言説で、当時においてただ独り抜きん出ていて、汲黯、蕭望之、李固、呉張昭、魏徴、狄仁傑の六君子の次に並ぶべき人物であった。

このとき朝廷は幸いにも清明で、大奸人も大悪人もいなかった。それでも公は人々の輪に加わることなく一人立ち、いわゆる「秋霜烈日」の厳しさで、しゅうそうれつじつ周囲と慣れ

親しまなかった。三度朝廷の外に出され、そのまま死に至った。もしも公がじゃねい邪佞の衆の間に置かれ、あるいは国家存亡の際に遭遇したならば、公の為すところは必ず世俗を絶して時代を驚かし、安易を好む連中の心臓を破裂させたばかりでなく、実に大きな事績を残したに違いない。

私はかつて初めて蘇州の虎丘寺に立ち寄って公の肖像画を見た。なおも烈しい遺

風がそこにあるのを感じて、願わくば公の僕しもべとなって仕えたいと思った。しかし、すでに時代は及ばなかった。

それから七年が経って私は徐州じょしゅうに来た。公の曾孫そうそんの王汾えんしゅうが兗州えんしゅうに向かう途中で立ち寄られ、公の墓碑を見せて下さり、何か文章を添えてほしいと頼まれた。そこで蘇州虎丘寺の肖像画の画賛を作ることにした。

以上が序文で、以下が画賛です。画賛は一句四文字の韻文ですが、いつも通り自由詩として訳します。

昔から聖賢は己を知る者がいないのに苦しまねばならない。

公は太宗皇帝に出会い、その時代において認められた。

皇帝は公を用いようとしたが、公は少なからず貶められた。おとし

三度辺地に追いやられ、ついに無念の死を遂げた。

それ以降、名臣と言えば公だということになった。

一時の不遇も万世に信を残したのである。まこと

いかなる者も公の肖像を拝すべきである。

見れば己を恥じて誰もが冷や汗を流すに違いない。

公は恥じることを教えてくれても、人々は公のようにはなれない。

公がすでに茫茫とした地下の人となってまた起つことのないのを悲しむ。ぼうぼう

——えーと、聞いてて、トバー君がいたいことはだいたいわかるような気がする。「君子がいないと国は成り立たない」というのは、さっきの「もやは英雄

はいない」というのと、ほぼ同じ意味のことだよね。そういう危機感をトバー君はずっと抱いていたんだね。

㊦ この画讚を書いた翌年に、私は罪を蒙り、黄州こうしゅうというところに流されました。実はその黄州こそは王禹偁が3回目に流された場所であったのです。

——へーえ、欧陽脩も王禹偁が流された州に左遷にされたし、トバー君もまた不思議な縁で結ばれていたってことなのかも。

㊦ さて、私の今回の4カ月間の旅は、蘇州で王禹偁の肖像画を見て、その後に続かなければならないとの思いを強くしてから杭州に到着して終わりました。以

来杭州で地方官として3年間を過ごし、いま顧みるとなかなか危あやういものがあったと言わなければなりません。それが伏線となつて、後に黄州に流されるに至るのです。

私は長らく「狂」キヤウを病む者となり、

ぽっかりと大きな穴が開いているのにも気付かずに歩いていたようだ。

酔よつ払はつて落ちてしまつて、

幸いにも、醒めたら傷を負っていなかったようなものだったのだ。

最初に聞いていただきましたように、弟と別れたときにこのように詠みました。これは杭州での日々にごそ当てはまるものであったようです。

——で、この続きはまた次回つてことみたい……今夜もそろそろ時間？

㊦ 杭州に到着したのは熙寧4（1071）年11月28日。そのすぐ後に弟に送った二首の詩を聞いていただいて終わりとしましようか。

眼みに看る時事に、我が力はもはや耐えられそうにない。

それでも、皇帝の恩を恋い貪って退けない。

どんくさい私は、いずれ辞表を投じて去らねばならないだろう。

そうしなければ、知事は早晚私を窓際族に追いやるであろうから。

——ん？ これって、いきなりもうギブアップってこと？ 王禹偁に続くぞという意気込みで杭州に乗り込んだんじゃないかなかったの？ なのにもう「引退オチ」なの？

ト 地方官としての任務に就けば、公おおやけの仕事を法令に従って処理しなければなりません。欧陽脩にしても張方平ちやうほうへいにしても、改革には反対であるのに、官僚の一員として中央の指令に従って改革を実施しなければならぬという矛盾に苦しみ、閑職を求めたり、引退したりしたということを前回お話しました。そうしたことは覚悟の上で杭州に赴任したのですが、実際に携わってみての苦しさは想像以上で、ついつい弟に向かってばやいてみると、ご理解いただきたいと思います。

「皇帝の恩を恋い貪る」とは、かつて皇帝に向かって勝負手を放ったときに、

皇帝は「朕の過失であつても指摘してよろしい」と私におっしゃって下さいました（👉第13回）ので、皇帝は私のことを理解して下さいとの思いがあり、いつしか国の政治を正しい方向に戻そうと皇帝が気付かれて、そのときにこそ皇帝の御恩に報いることができるはずなので、今は辞めるわけにはいかないということですよ。

——「窓際族」っていうのは、どういうこと？ そんなことばは昔はなかったよね。

👉 ここは差別的な表現だと受け止められかねない恐れがあるので、かなりの意訳で、ぼんやりと窓際族としてみました。原文を示せば、

使君何日換聾丞（使君 何れの日か聾丞を換えん）

「使君」とは知事のこと、具体的には当時の杭州知事の沈立です。「聾丞」とは、耳の聞こえない丞じょうという人です。漢の時代に許丞きよじょうという人がいて、老いて耳が聞こえ難くなり、許丞を嫌う人々は、そのことを理由に辞めさせようとなりました。この句は、耳が遠くなった許丞と同じように、私も役立たずのレッテルを貼られて職務を解かれてしまうだろうと言っているわけです。かなり嫌な感じがしますよね。ただし、これには若干の含みがありまして、耳が聞こえ難いのなら何度も聞き直せばいいので、清廉潔白な許丞を辞めさせる理由にはならないと弁護する人がいて、仕事を続けることができました。私の場合も、言外に知事は理解して

下さるであろうとの思いが籠められていて、事実、そうなったのです。

弟に送った二首目は……

陛下は聖明にして寛大で、この身を全うすることを許して下さいました。

しかし、私は病み衰え、ぐだぐだに崩れて人を畏れるばかりである。

君は心配の余り、岡に登って懸命にこちらを見ようとするだろうか。

それには及ばない——かまじ竈の神を祭って君の隣りに住むことを祈っているから。

——竈の神様ってなに？　なんかそういうおまじないみたいなものがあつたんだろ
うね。本心としては、弟さんに心配してほしいってこと？　弟さんと別々になる
といつもおかしくなるっていったけど、今度もそういうことになったのかな？

* * *

英語の詩やフランス語の詩を原文で読もうとする人はそれほど多くはないだろう。しかし、漢詩を原文なしで読む人はあまりいない。原文を一切掲げない漢詩の本は極めてまれだ。日本語を普通に使っている人なら、漢詩の原文を眺めれば、部分的ながらも何かしら意味を掴めるだろう。注解の助けを借りれば、ほぼ読みこなすことも可能だ。原文があつた方が、日本語に訳されたものを読むだけよりも、より深く鑑賞できるのはほぼ確かなところだろう。

しかし、漢詩は古い中国語、それも詩を作るために特別に工夫された中国語で構成され、昔の中国人でもそう安易に読みこなせるものではなかった。現代のわれわれはなまじ漢字を知っているがために、中途半端な理解で、時にはかなりの

誤解をして、わかった気になってしまふということがないとは限らない。

トバー君は（蘇東坡本人であるとの主張を認めるならば）自作の詩をいわゆる「超訳」で語っている。それは、居酒屋の喧騒の中であつても、耳で聞いただけで詩のツボがわかるように伝える工夫であるのだろう。「超訳」は、イノ君が嫌う漢文の授業のようなことなしに、何十倍も速く数多くの詩に親しむことができ、その効用の大きさは認めはするものの、ときどき原詩を引用して説明しているところからもわかるように、「超訳」の程度はかなりのもので、原詩からの距離が大きすぎると思わないわけにはいかないところもある。

かねてからそのことが気になり、トバー君の語りをネット上で公開するに当つては原詩も添えた方がいいのではないか、しかし、そうするとトバー君の「超訳」の味わいを損ねてしまうのではないかと、あれこれ迷いがあった。今回、「超

訳」に準拠したスタイルでの変則的な訓読法を試み、それを付録として載せることにしてみた。これが蘇軾の詩により接近する助けとなればと思うのだが、もしかすると逆効果であったりするのだろうか。

● 付録

『蘇軾詩集抄』

熙寧4（1071）年9月～11月 蘇軾36歳

本文は凡礼点校『蘇軾詩集』（中華書局、1982）に準拠。訳文中の赤字は訳の都合で補った部分、傍線は人名や地名などの固有名詞であることを示す。

■ 穎州初別子由二首

穎州えいしゅうで子由おとうとと別れた初わかの二首ばかりにしゅ

征帆掛西風、

征たびく帆をゆが西風ほに掛にしかぜけられると、か

別涙滴清穎。

別わかれの涙なみだが清きよらかな穎えいすい水すいへしたたと滴したたりおちる。

留連知無益

ぐずぐず

よいこと

な

わか

留連しても益は無いと知ってはいても、

惜此須臾景。

こ

瞬間

こうけい

お

此の須臾の光景を惜しまずにはいられない。

我生三度別

わたし

じんせい

きみ

私の人生に君とはすでに三度の別れがあり、

さんど

わか

此別尤酸冷。

こ

わか

もっと

つらくさび

そして此の別れが尤も酸冷しい。

念子似先君、

おも

きみ

亡き父

に

念うに子は先君に似ていて、

木訥剛且静。

ぼくとつ つよ そし しず
木訥で 剛く且て静かである。

寡詞真吉人

口数が少ない まこと よ ひと
寡詞のは真に吉い人だといわれるとおりで、

介石乃機警。

いし かた しか きち と かしこ きみ
いわゆる石のように介く 乃も機知に富んで警いというのも君のこと
だ。

至今天下士、

いま いた てんか したいふ
今に至るまで天下の士大夫で、

去莫如子猛。

朝廷ちやうていを去るさにあたって子きみより如たけも猛いなだけしかつたひとは莫いない。

嗟我久病狂

嗟ああ 我わたしは久ずうつと狂きやうというものを病やんでいて、

意行無坎井

行いくところ落とし穴に坎井ななどは無おもいと意おもいこんでいたのだ。

有如醉且墜

有たとえ如たていうならよ 醉ままった且おそこおに墜おちても、

幸未傷輒醒。

幸さいわいにも傷きずつか未ないで輒すぐに醒さめたようなものだった。

従今得閑暇

いまから ひま え
従今は閑暇を得たときにも、

黙坐消日永。

だま すわ ひ なが け
黙って坐って日の永さを消すようにしよう。

作詩解子憂

し つく きみ 心配 と
この詩を作って子の憂いを解くだけでなく、

持用日三省。

ひ さんど はんせい 実行
日に**三度**ずつ反省するということを持用するつもりだよ。

*

*

近別不改容

ちか わか 表情 あらた ない
近い別れには容を改めることも不けれど、

遠別涕沾胸

とお わか なみだ おね ぬら
遠い別れには涕が胸を沾すだろう。

咫尺不相見

數十センチ
わずか咫尺のところにおいても相見ことがないのなら、
向き合おう

実与千里同。

じっさい せんりはな とおな
実際には千里離れているのと同じだ。

人生無離別、

じんせい わかれ な
もしも人生に離別が無かったならば、

誰知恩愛重。

だれ おんあい おも し
誰も恩愛の重さを知らないでいるだろう。

始我来宛丘、

はじ わたし えんきゆう き
始めて我が宛丘に来たときに、

牽衣舞兒童。

きみ こどもたち わたし こども ひ ダンス
君の兒童は私の衣を牽いて舞をした。

便知有此恨、

すぐ こ わか つらさ あ し
そのとき便に此の別れの恨が有ると知ったことが、

留我過秋風。

あきかぜ きせつ す わたし とど
秋風の季節が過ぎるまで我をここに留めさせたのだった。

秋風亦已過、

あきかぜ とつく す
秋風は亦已に過ぎてしまったけれど、

別恨終無窮。

わが づら つい きわま
別れの恨さは終に窮るところが無い。

問我何年帰

きみ わたし と
君は 我に問う―「何の年に帰るのか」と。

我言歳在東。

わたし い 木星 ひがし あ
我は言う―「歳が東に在るときだ」と。

離合既循環、

別れ 出合い もと じゆんかん
離と合とは既から循環しているもので、

憂喜置相攻。

うれ よろこ かさな たがいちがい ひと いためつけ
憂いと喜びは置つて 相に人を攻るのである。

悟此長太息

こ
此のことがいま悟わかつて長く太ながく息ふとをつくいきー

我生如飛蓬。

そうだ
わたし じんせい 我の人生は風かぜに飛ぶ蓬との如よもぎなものなのだ。よう

多憂発早白

でも
うれ おほ 憂すくいが多いと早かみに髪しろが白なく発なつてしまうのは、

不見六一翁。

ほら
欧陽脩 み 六一翁を見たらそうだとわかるよね。

■ 十月一日将至渦口五里所遇風留宿

十月一日、渦口に将いよ至ろうとしてあと五里の所で風に遇い留
ま^{やと}つて宿^{かこう いよ いた}つた

長淮久無風

なが^{なが}わい^{わいが}が
長い淮河へとおかいつ久つと風が無かったので、

放意弄清快。

おもい^{おもい}かい^{かいほう}ほう
意を解放して清らかな快を弄んでいた。

今朝雪浪満

け^{けさ}さ^{ゆき}
ところが今朝は雪のような浪が満に立ち、

始覚平野隘。

は^{はじ}じ^{へいや} ^{せばま} ^{おほ}
始めて平野が隘るのを覚えた。

両山控吾前

ふた やま わたし まえ ひか
 両つの山が 吾の前に控えていて、

吞吐久不噤。

の は しば ひとロ
 そこに呑まれるのか吐かれるのか 久らくその噤がきまらなかった。

孤舟繫桑本、

一艘 ふね くわのき もと つな
 こうして わが孤の舟を 桑の本に繋ぎ、

終夜舞澎湃。

ひと晩中なみ ゆらゆら ま
 終夜波の澎湃に舞うようなことになった。

舟人更伝呼、

ふなびと たがい よびあ
 舟人は更いに伝呼って、

弱纜侍菅蒨。

よわ

草の茎

弱よわしい菅蒨を編んだような纜だけを恃みとした。

ともつな

たの

平生傲憂患、

ふだん

こまりごと

平生から憂患など屁でもないと傲り、

おご

久已恬百怪。

どんな

あやし

百な怪げなことも久つと已かり恬てかかっていた。

ずう

すつか

なめ

鬼神欺吾窮、

わたし

きしん

まんま

こまら

そんな吾を鬼神どもは欺と窮せてやろうと、

戲我聊一噫。

わたし

たわぶ

とにか

ひと

まいった

我に戯れかかって聊く一つ噫といわせようとしているにちがいない。

瓶かめ中なか尚まだ有さけ酒あ

それでも 瓶かめの中なかに尚まだ酒さけが有あるのなら、

信命誰能戒。

わが命運めい운を信じ誰しんかの戒だれ なんぞを能おせつかいはない。
聞聞く気気

■出えいこう穎で口わいざん初見み淮山み是すぐ日至こ寿州ひ

穎口えいこうを出でて淮山わいざんを見みてから 初すぐに是この日ひのうちじゆしゆうに寿州いたに至いたった

我行日夜向江海

わたし たび にちやさすらいの地 む
 我的行は日夜江海に向かいつつあるけれど、

楓葉蘆花秋興長。

かえて は あし はな み
楓の葉に蘆の花を見れば秋の興趣は長い。

長淮忽迷天遠近

なが
長すぎるくらいわいがの淮河ともすに忽てんれば天とおが遠ちかいか近わからなくいか迷なったり、

青山久与船低昂

あお やま いっ ふね 一緒 ひく
青山が久も船と与たかに低ひくくなったり昂たかくなったりしている。

寿州已見白石塔

じゅうしゅう
寿州は はくせきその白石とつの塔みが已みくに見みえているのに、

短棹未転黄茅岡

みじか さお ま こうぼう おか
短い棹は未あやうだ黄茅あやうの岡あやうのあたりで転あやうられている。

波平風軟望不到

なみ なく かせ よわ
波は平て風は軟いので 望みえているのにちちつともそそここにいたらない、

故人久立煙蒼茫

ふる とも なが 夕霧 ぼんやり
故人は久いこと煙の蒼茫としたなかに立たっているのであるう。

■寿州李定少卿出餞城東竜潭上

じゆしゆう りていさん で まち ひがし りゆうたん ほどり 送別会
寿州の李定少卿が出てきて 城の東の竜潭の上で餞饗をしてく

れた

山鴉噪処古靈湫

やま からす さわ ところ ふる 神さび いけ
山の鴉あが噪なぐ処ところとは 古ふるい靈たまたこの湫いけで、

乱沫浮涎繞客舟。

竜りゆうが吐はいて乱みだれた沫あぶくやら浮うびでた涎よだれらしきものが客われらの舟ふねにまわりつ繞いっている。

未暇燃犀照奇鬼

犀さいの角つのを燃もやして奇き怪かいな鬼おにを照てららすようなこと未まではやらない暇あけれど、

欲将烧燕出潜虬

燕つばめを焼やいいて潜ひそんでいる虬若い竜をおびき出だすくらいのことなら欲してみ将いてもよ

使君惜別催歌管

使君知事が別わかれを惜おしんで歌うたと管ふえを催もよおしてくれと、

村巷驚呼聚獮猴

むら まち さわが
村や巷が驚呼しくなつて
さるども あつま
獺猴が聚つてきたではないか。

此地他年頌遺愛

ここ いっしかちじ のこ
此地で他年知事の遺した愛のあとを頌ることがあるのなら、

観魚并記老莊周。

うお み おかし 莊子
魚を観て老の莊周のように語ったことも
あわせ 思い出し
并て記してほしいものだ。

■濠州七絶

こらうしゅう
濠州での七つの絶句から

其二 彭祖廟

そ に ほうそびょう
其の二 彭祖廟

跨歴商周看盛衰

ほうそ しょうちゆう しゅうちゆう またが へ せいすい み
彭祖は商朝と周朝を跨り歴てその盛衰を看て、

欲将齒髮鬪蛇龜。

壽命 永遠に死なない超生命 あら ばかり
その齒髪ときたら 蛇 龜 と鬪そう欲将だった。

空餐雲母連山尽、

うんも やままることた っ おな
しかし 雲母を山 連餐へ尽くしたのも空しく、

不見蟠桃著子時。

せいおうぼ もも 実 たわわ とぎ み なか
西王母の桃が子を蟠につける時を見ることはなかったのだ。

*

*

其四 觀魚台

其の四 観魚台そよん かんぎよだい

欲将同異較錙銖

一粒か二粒 ちがひ も くら よう

たった錙銖の同異で将つて較べ欲としたら、

肝胆猶能楚越如。

かんぞう たんのう さえ そこく えつこくくらい

肝臓と胆嚢で猶も楚国と越国如にちがうぞということに能だろう。

若信万殊帰一理

もし すべてもろもろ ひと ことわり かえ

若も万殊が一つの理に帰るといのが信なら、

子今知我知魚。

きみ いま わたし し わたし うお し

子は今 我を知ったのだし 我は魚を知ったのである。

*

*

其七 浮山洞

そ なな ふざんどう
其の七 浮山洞

人言洞府是鰲宮

ひと い ふざんどう みや すなわ 東の海の底 みや
人は言う 浮山洞の府は是ち 鰲の宮であると、

升降随波与海通。

なみ したが ふざんどう あが さが うみとつう
だから波に随う 浮山洞の 降り降りは海と通じているのだ。

共坐船中那得見

ふね なか すわ じょうげ きじゆん わか はすがない
船の中に共坐っていたのでは 上下の基準がどこかで見える那得の

で、

乾坤浮水水浮空。

大地 みず うか 乾坤が水に浮び みず そら うか 水が空に浮んでいるのもおなじなのである。

■ 泗州僧伽塔

ししゅう そうがとう
泗州の僧伽塔

我昔南行舟撃汴、

わたし かつ みなみ たび ふね べんが つな
我は昔て南に行して舟を汴河に撃いだところで、

逆風三日沙吹面。

ぎやくふう みっか すな かお ふ
逆風が三日にわたってつづき 沙が面に吹きあつた。

舟人共勸禱靈塔、

ふなびと みんな くすし そうがとう いの すす
そのとき 舟人が共で靈き僧伽塔に禱るよう勧めたので、

香火未收旗脚転。

こう ひ

まだきえ

ふきながし くるりと向きをか

香に火をともすとそれが未收ないうちに旗脚が 転 えた。

回頭頃刻失長橋

ふりかえ

たちま

なが

はし

見えなく

回頭ると頃刻ち長い橋も 失なり、

却到亀山未朝飯。

すぐ

きざん

つい

ま

あさめしまえ

却にも亀山に到たのは未だ朝飯前だった。

至人無心何厚薄

道を究めた人

むしん

至人は無心であろうからだれかに厚くだれかに薄くする何がない

のに、

我自懐私欣所便。

わたし ふつう 自分だけ
 私は自に私のことだけを懐つて所便と欣んだのだった。

耕田欲雨刈欲晴

た たが あめ ほし か はれ ほし
 田を耕すときには雨になって欲しいし 刈るときには晴であつて欲しい、

去得順風来者怨。

ゆ もの じゅんふう え く もの いや
 去く者が順風を得れば 来る者はそれを怨がる。

若使人人祷輒遂、

もし ひとびと いの すぐ かな
 若使も人人が禱ることに輒に遂てやろうとしたら、

造物応須日千変。

ぞうぶつしゅ きつ 一日 千回 かわ ならな
 造物主は応と日に千も変らなければ須いだらう。

我今身世両悠悠

わたし いま
我は今 わが身と世のなかの両とも悠悠あるがままということにして、

去無所逐來無恋。

ゆ 追いかけて つもり な
去くものを 逐る所も無いし 来るものを恋うことも無い。

得行固願留不悪

すす でき もと ねが
行むことが得るのは固から願うところではあっても 留るのも悪くは

ないだらう、

每到有求神亦倦。

く たび もと あ
ここに到る毎にあれこれ求めるものが有っては神さま亦倦りさ。

退之旧云三百尺、

唐の轉愈 かつ どう たか さんびやくしやく
退之は旧てこの塔の高さは三百尺あったと云っているけれど、

澄観所宮今已換。

ちようかん つく

澄観が嘗ったそのときとは今は已いまに換すでわってしまかっている。

不嫌俗土汗丹梯、

ぞく

かんが

人間

あか

階段

けが

いやが

ない

このような俗なことを考かんがえる士人間が丹あかい梯階段を汗けがすのも嫌いやがら不ないいでくれるのなら、

一看雲山繞淮甸。

くも

やま

こら一帯

とりま

ちよい

み

雲をかぶった山が淮甸こら一帯を繞とりまくのを一ちよいと看みさせてもらうとしよう。

■ 龜山

龜山 きせん

我生飄蕩去何求、

わたし いきさま ふわふわ

私の生は飄蕩としていて

すす なに も

去んで何を求めようとしてきたのか、

再過龜山歳五周。

ふたたび きざん すざい

再び龜山を過るまでに歳が五つも周ってしまった。

とし いっ まわ

身行万里半天下、

み ばんり い てんか なかば

この身は万里を行き 天下の半にもなろうとするあいだに、

僧臥一庵初白頭。

やま そう ひと いおり ふ はくはつ とうとう

この山の僧は一つの庵に臥しおきして 白頭に 初 なってしまった。

地隔中原劳北望、

ち 国の中心 とお みやこ した ひと きた じつ みつめ

この地は中原から隔く 都を慕う人は北を労と望るようなことにな

るものだが、

潮連滄海欲東遊。

ここにまで大海滄海からの潮しおが連とどいて わたしはさらにひがし東へと遊いこうと欲してい

る。

元嘉旧事無人記、

数百年前 数百年前 ふる こと しって ひと 元嘉の旧い事を記いる人はもう無いないから、

故壘摧頽今在不。

そのころ とりで くずれ 故の壘は摧頽いまてしまあって今は在どうかるか不どうかもわどうかからない。

■ 発洪沢中途遇大風復還

こうたく たつ ちゅうと おおかせ あ ま かせ
洪沢を発て中途で大風に遇い復た還つた

風浪忽如此

かせ なみ たちま こ よう
風と浪が忽ち此の如になつてしまつたのは、

吾行欲安帰。

いっ た わたし たび き ちやくてん しよ
安い吾の行はどこをついの帰着点に欲うとしているからなのか。

掛帆却西邁

ほ か ひつくりかえし にし ゆ
帆を掛けて 却 に西に邁くしかなくなつたのだが、

此計未為非。

こ プラン とりあえ まず なか
此の計は未ずは非くは為つたといえるだろう。

洪沢三十里

洪沢こうたくまでのもどりは三十里さんじゅうり、

安流去如飛。

安やすやすと流ながれて去ゆき飛とぶ如かのようだった。

居民見我還、

居民土地の人は我わたしが還かえってきたのを見みて、

労問亦依依。

労いたわり問たずねてくれたのは亦まことに依ねんごろ依ごであった。

携酒就船売、

酒さけを携たずさえて船ふねにまで就きて売うってくれて、

此意厚莫違。

此の意の厚さは違莫いてくれとおもうほどであった。
そ こころね あたたか かわらないで

醒来夜已半、

かくして 醒て来たのは夜も已に半ばのことで、
目がさめ き よる すで なか

岸木声向微。

岸の木の声は微に向ある。
きし き おと かすか なりつ

明日淮陰市、

これなら明日には淮陰の市につくだらう、
あした わい いん いち

白魚能許肥。

名産の白魚は許に肥えて能ることか。
めいさん はくぎょ どれほど こ いる

我行無南北

わたし たび みなみ きた
 我的行は南も北もきまりは無のであつて、

適意乃所祈。

こころ びつたり つま 行きたい ところ
 意に適したところが祈とした所なのだ。

何勞弄澎湃

わたし こま わざ ゆさゆさ もてあそ
 私を困らせようと労わざ澎湃と弄んでくれて、

終夜搖窓扉。

ひとばんじゅうまど ゆら どう
 終 夜窓扉を揺らしてくれたのも何ということないのだ。

妻孥莫憂色、

つま こ うれ ようす ない
 妻や孥にも憂いの色が莫のは、

更有篋中衣。

更まだまたはこ篋なかの中にはしちい質しちい入れする衣ころもが有あるからである。

■十月十六日記所見

十月十六日 見た所を記す
じゅうがつじゅうろくにち み まま しる

風高月暗水雲黃

風かぜがたか高いところをふき吹き 月つきがくら暗く 水みずと雲くもがき黄いろほかった、

淮陰夜発朝山陽

そんな夜よるに淮陰わいいんをた発たつて 朝あさには山陽さんようについた。

山陽曉霧如細雨、

山陽さんようのあさ曉きりは霧こまかが細あめい雨ようの如ようにただよっていて、

炯炯初日寒無光。

きらきら のぼつて

ひ さむ

ひかり な

炯炯と初くるはずの日は寒ざむとして光が無かった。

雲收霧卷已亭午、

くも おき きり ま

もうひるどき

雲が収まって霧が巻きあがったのは已亭午で、

有風北来寒欲僵。

かせ でて

きたから

さむ

たお

そう

すると風が有きて北来の寒さに僵され欲になった。

忽驚飛雹穿戸牖、

すぐ おどろ

ひょう

と

と

まど

う

忽に驚かされたのは雹が飛んで戸や牖に穿ちつけたことで、

迅駛不復容遮防。

はやさ

とて

さへぎ

ふせ

すべ

なか

その迅駛さといったら復も遮り防ぐ容が不った。

市人顛沛百賈乱

いち ひと

上へ下へのさわぎ

あらゆる商売もの

めちやくちや

市の人たちは顛沛で百賈が乱になつてしまひ、

疾雷一声如頽墻。

ドーン

かみなり

一発鳴っ

かべ

くず

よう

疾と雷が一声たのは墻が頽れたかの如だつた。

使君来呼晚置酒、

知事

さき

まねい

すると使君が来て呼てくれるには、晩にお酒を置しましうと、

坐定已復日照廊。

顔ぶれがそろ

かくて坐定つたところで已復日が廊下を照らしてくれたのだつた。

おりよくひ

ろうか

悦疑所見皆夢寐、

おやおや

み

もの

みんなゆめなか

うたが

悦こうなると見た所は皆夢寐のことであつたかと疑われるほど

で、

百種変怪旋消亡。

ひやくしゆ へんいかい き さつ き うせ
 百種の変異怪奇が旋と消え亡せてしまったのだった。

共言蛟竜厭旧穴、

くちぐち い たつ ふる あな あ
 共に言うには 蛟竜が古い穴に厭きて

魚鱉随徙空陂塘。

うお かめ したが 水辺 から うつ
 魚やら鱉やらを随えて陂塘を空っぽにして徙っていったのだろうか。

愚儒無知守章句、

おろ インテリ むち テキスト 丸覚え
 愚かな儒は無知でただ章句を守っているだけなので、

論説黑白推何祥。

くろ
しろ
あてずっぽう
なに
きざし
せつ
黒なのか白なのか 推あてずっぽうに何かの祥きざしではないかとあてあてにならない説せつを
ろん
論じるのだ。

惟有主人言可用、

た 知事 い
こと
もち
よい
惟だ主人の言うこの有ことことだけは用もちいるのが可よいだろつ、

天寒欲雪飲此觴。

さむざら ゆき ふりそつ
こころ さけ の
「この寒天さむざらで雪ゆきも 欲ふりそつですから此こころは觴さけを飲のみましようぞ」

■ 広陵会三同舎各以其字為韻仍邀同賦

こうりよう あ 三日
ともにすべ
それ
そ
あやな も
いんじ す
広陵こうりようで会あつて三三日のあいだ同舎ともにすべし各それぞれ其その字あやなを以もつて韻字いんじに為する

ことにしそれ 仍あつまでまた邀いっしょつて同しに詩ふを賦ふした

其一 劉貢父

其の一 劉貢父（劉攽）に
そ いち りゆうこうほ りゆうはん

去年送劉郎、

去年きよねん りゆうさん おく 劉郎りゆうさんを送おくったときに、

醉語已驚衆。

わたし **私**らよが酔よつて語かたつたことでは衆みんなを驚おどろかせて已しまった。

如今各漂泊、

それから 如今あなたも私は各さすらいの身も漂さすらい泊の身となり、

筆硯誰能弄。

文学の世界 あそ 二人 でき
筆硯に弄ぶことも誰には能なくなってしまうた。

我命不在天、

人 命運 てん

私の命は天において きまつている 在 なの もの不だろるか、

羿穀未必中。

弓の達人

羿 矢 であっても ぎじゆつ 穀はその技術 きつ だけで あた 必と中るとは かぎ 未らないという。

作詩聊遣意

し つく すこし おもい はら

詩を作るのは聊ばかり意を遣すためだけなのだが、

老大慵譏諷。

だんだん あげつらわれる おっくう

老大と譏諷のが慵になってきた。

夫子少年時

孔子先生 わか ととき
夫子は少年い時はとくに、

雄弁軽子貢。

口が達者
雄弁なのはよろしくないと戒め 弟子の子貢を 軽 しなかつた。
あまり評価

爾来再傷弓、

わたくし くち
かくいう私こそ、口のために爾来再も弓で傷つけられたので、
かれこれ二度 ゆみ きず

戢翼念前痛。

つばさ たた ささき いた
翼を戢んで前の痛みをじっと念っているようなものだ。
おも

広陵三日飲、

こうりょう
そんなときに広陵でみなさんと三日飲みくらして、
みっかの

相对恍如夢。

向き合つて ほんやり
相対いながら 悦として ゆめ
夢のなかにいる かのよう
如である。

況逢賢主人、

まして 尊敬する錢知事 おられ
況や賢主人が逢て、

白酒澆春甕

はる
春をむかえようとする甕からの 澆の白い酒もあるのだから。
かめ くみたて しろ さけ

竹西已揮手、

竹西亭 すで
竹西で已に手を揮つて ふ
別れたうえに、
わか

湾口猶屢送。

さら 川への出口 かさね おく
猶に湾口で屢て送つてくださるとは……。

羨子去安閑、

あなたがゆ
子が去くところは安閑あんかんとしているのを羨うらやましくおもう、

吾邦正喧哄。

わたし
地方ちほう ちよう 大さわぎ
吾がゆく邦は正ど喧哄けんこうになっているらしいので。

* * *

其二 孫巨源

そ に そんきよげん そんしゆ
其の二 孫巨源(孫洙)に

三年客京輦、

さんねん
三年のあいだわたしは京輦きやんの客きやくとなって、

憔悴難具論。

しょうすい
憔悴しょうすいしたことといったら具ぐに論ろんのは難むずかしいくらいだ。

揮汗紅塵中、

政界のこたごた なか あせぐっしより

紅塵の中で汗揮となり、

但随馬蹄翻。

できるこ

なりゆき まか

但といったら馬蹄翻に随せるだけだったのだ。

人情貴往返、

ひと へんりつ

レスポンス

よし

人の情はいつも往返があるのを貴とするもので、

不報生禍根。

いみかえり

しない

わざわい

もと

つく

すぐに報を不と禍の根を生ってしまう。

坐令平生友、

そんなこと

ふだん とも

坐から平生は友だったはずなのに、

終歳不及門。

もうにと うちの數居をまたぐな いわれて

終歳と不及門と令しまったりしたのだった。

南来実清曠

みなみ き まこと からりとしたい気分

南に来てからは実に清曠で、

但恨無与與言。

た とも かなりあ いな 残念

但だ与に言うひとが無いのを恨におもっていた。

不謂広陵城、

い ない こうりょう まち

しかし謂わ不でおこうここ広陵の城で、

得逢劉与孫。

りゆう とそん あ でき

劉さんと孫さんに逢うことが得たとは。

異趣不両立、

好ましいとするもの こと

共通理解 できない

趣 が異なると両立が不もので、

譬如王孫猿。

たとえ

さわがしいサル おとなしいサル よう

譬るなら王孫と猿の如なものだ。

吾儕久相聚、

われら

しばらく あつまって

吾儕がこうして長く相聚いるだけでも、

恐見疑排根。

うたがわ

つまはじき

見疑れて排根されてしまうのを恐れないわけにはいかない。

我編類中散、

わたし ひねくれ

竹林の七賢人

私の編は中散

けいこう

(の嵇康)

似て

に類いて、

子通真巨源。

あなた

心の広さ

ちよう

その友人

さんとう

子の通は真ど巨源(の山濤)のようだ。

絶交固未敢、

とはいえ、そのふたりのように絶交ぜつこうすることは固もとより未敢ないはずで、

且復東南奔。

しげら

且まくのあいだ復たあなたとわかれて東南とうなんに奔はしるだけなのである。

*

*

其三 劉莘老

そ

さん

りゆうしんろう

りゆうし

其の三 劉莘老(劉摯)に

江陵昔相遇、

むかし ころりよう あ
昔ころ江陵で相遇ったときには、

幕府称上賓。

地方政府 要職

あなたは幕府の上賓にあつて称ていた。
敬われ

再見明光宮、

つぎ 皇城の宮殿 あ

再到明光宮で見たときには、

峨冠挹搢紳。

立派なかんむり

大官諸氏 ひきつ

峨冠をかぶった搢紳を挹れていた。

如今三見子、

そしていま みたび

あなた あ

如今 三めに子に見うと、

坎珂為逐臣。

不遇 都をおわ 官員 な
 坎坷にも 逐れた臣と為ってしまったている。

朝遊雲霄間、

たとえるなら あさ 朝には雲霄間に遊んで、
雲の上の世界 あそ

欲分丞相茵。

じょうしょう 丞相と茵を分べ欲としていたのに、
せき なら よう

暮落江湖上、

くれ 暮には江湖上に落ちて、
いなかのみずべ お

遂与屈子隣。

つい 遂にはかの(罪なくして追放された)屈子与隣 つみ ついほう 屈原 ととなりあ う まで にな って しま っ
 たようなものだ。

了不見喜愠

けつ よろこ いかり み な

それでも了して喜びも愠も見せないのは、

子豈真可人。

あとな まこと できたひと

子は真に可人というくらいでは豈ないだろう。

すま

邂逅成一歎

出合い すぐ よろこ うま

こうした邂逅で一に歎びが成れ、

醉語出天真。

よ かた 純粹な心 で

酔つての語りは天真から出てくるものである。

士方和田裏

おのこ 田舎 うち い とき

士は田の裏に在る方には、

自比渭与莘。

自分 あの宰相やあの賢人 おなじ

自は渭与莘と比であろうかと思ったりするものだが、

出試乃大謬、

よ で 用いられよう

世に出て 試 とするのは 乃の大きな謬りなのだ、

そもそも おお あやま

芻狗難重陳。

まじないに使うわらの犬

芻 狗 は(用がすんだなら)重や 陳 ことだって 難いのだも

もは わんわんほえる

できな

の。

歳晚多霜露

とし くれ しも つゆ おお

いまは歳の晩で 霜や露が多く、

帰耕当及辰。

ふるさと かね たがや ちようど
故郷に帰つて耕すには当よろしい辰に及 ことでありましよう。

■遊金山寺

きんざんじ あそ
金山寺に遊ぶ

我家江水初発源、

わ いえ 長江 みず はじ みなもと はっ
我家は江の水が初めて源を発するあたりにあるのに、

宦遊直送江入海。

役人 さすら 長江 うみ はい 見送 あたり
宦として遊うちに江が海に入るのを送る直にまできてしまった。

聞道潮頭一丈高、

きくどころ あき うみ しお かしら いちじょう たか
聞道では秋に海からさかのぼる潮の頭は一丈もの高さになるとい

うけれど、

天寒尚有沙痕在。

寒い季節すな しお あと つい い かの

天寒のいまは沙に潮の痕が在て有る尚ようだ。

中冷南畔石盤陀、

有名な泉みなみ へり いし こんもり積まれて

中冷の南の畔は石が盤陀いて、

古来出没随濤波。

おかし なみ まにまに で きえ

古来から濤波の随に出たり没たりしている。

試登絶頂望郷国、

せつちやう のぼ ふるさと み してみ

絶頂に登って郷国を望ようと試たところ、

江南江北青山多。

かわ みなみ かわ きた あお やま たくさんに
江の南にも江の北にも青い山が多あるばかりだ。

羈愁畏晩尋歸楫

たび うれい よる おそ かえ ふね たず
ここに羈の愁いがおこり 晩になるのを畏れて帰る楫を尋ねると、

山僧苦留看落日。

やま そう らくじつ み ねんごろ 引き留め
山の僧に落日を看ていきなさいと 苦に留られる。

微風万頃靴文細、

ゆうひ かすか かぜ くつ かわ しわ こま なみもよう はるかにひろがる
夕日のなかで 微な風で靴の皮の文のような細かい波模様が 万頃

と、

断霞半空魚尾赤。

ちぎれちぎれ かすみ そら なかは うお お あか
断の霞が空の半にまでかかって魚の尾のように赤くそまる。

是時江月初生魄

このとき つき 地球からの照り返し

しよう ばか

是時は江月に 魄 が生じた初りで、

二更月落天深黒。

夜早く つき お てん まっくろ

二更に月が落ちてしまふと天は深黒になる。

江心似有炬火明、

かわ 中心 たいまつ あか に

すると江の心に炬火の明りに似たものが有つて、

あ

飛焰照山棲鳥驚。

と ほのお やま て す とり おどろ

飛びあがる焰が山を照らし棲む鳥を驚かす。

悵然帰臥心莫識、

思いを残し 考え ふ こころ しれ

悵然て帰つて臥したのだけれど 心に識るところが莫く、

な

非鬼非人竟何物。

あれは鬼おにによるのでは非ないだろうし人ひとによるのでは非ないだろうし 竟ついに
何物なにものだったのだろうか。

江山如此不帰山、

江かわと山やまが此この如ようであるのを見みながら山故郷に帰かえら不ないでいるので、

江神見怪驚我頑。

江かわの神かみが怪あやしいことを見あらわして我わたしが頑かたくななのを驚おどろかそうとしたのだろ
うか。

我謝江神豈得已、

そのことで我わたしは江かわの神かみに謝感謝はするけれどこれは 豈しかたないとしかいいようがない
得 已 の

だ、

有田不帰如江水。

暮くらすに足たりる田たが有あるのに帰からないのなら
 我わが身みは江かわの水みずと如なって
 遠とおく流ながれて消きえてしまいうと誓ちかって言いうであろう。

■自金山放船至焦山

金山きんざん自船からふねを放だして焦山しょうざんに至いたる

金山楼観何耽耽、

金山きんざんの楼観建物群は何なんとも耽耽奥が深いものがあり、

撞鐘擊鼓聞淮南。

かね つつ たいこ う 対岸一帯
鐘を撞いて鼓を撃つなら淮南にも聞えることだろう。

焦山何有有修竹、

しょうざん なに あ
焦山に何が有るのかというときせいぜい修竹が有って、
よいたけ あ

采薪汲水僧両三。

たさぎ と みず く 坊さん 二三人
薪を采り水を汲む僧が両三ほどはいようかとのこと。

雲霾浪打人跡絶、

くも 土がふる きせつ なみ う 行く人 まったくな
いまごろは雲から霾のような季節で浪も打ちつけて人跡は絶く、

時有沙戸祈春鸞。

たま 川べりの農民 はる かいこ せいちょう
時に沙戸が春に蠶が成長するのを祈りにいたりすることが有るく
いの あ

らいだと。

我来金山更留宿

わたし きんざん き とまりを重ね

我は金山に来て更留宿で、

而此不到心懷慚

しか こゝろ 行かない こゝろは はずかしくおもふ

而し此には不到をでているのを心に懷慚ようになった。

同遊尽興決独往

いっしょ あそぶ

同に遊びにきたひとたちは尽興というけれどわたしは独りでも往く

と決めたのは、

賦命窮薄輕江潭。

お上の命じるがまま どれほど困つて 辺境の地 身を軽く

賦 命に窮薄も江潭でも軽くしていく覚悟があるからだ。

清晨無風浪自湧

ふね はな
船を放ったのは
すがすが
清しいで晨風は無く浪は
あさ かせ な なみ あるがまま
自に湧きたち、
わ

中流歌嘯倚半酣。

ながれのなかほど ふなびと 歌がおこる なか 酔う ゆったり
中流で船人の歌嘯のを半ば酣ようにして倚ときく。

老僧下山驚客至

ろうそう やま くだ 訪問客 やってきた びっくり
老僧が山を下つてきて客が至のに驚し、

迎笑喜作巴人談。

わら むか ふるさとなまりではなす よろこ
笑つて迎えてくれてしかも作巴人談のを喜びもする。

自言久客忘郷井、

老僧 い ずうつ ここにい ふるさとのこと
自が言うには久と客て郷井は忘れていました、

只有弥勒為同龕。

ただみろく菩薩像 あ おな 部屋 いる
只弥 勒が有つて同じ龕に為だけなのですと。

困眠得就紙帳暖

よる つか ねむ
その夜は困れて眠つたので 紙の帳でも暖く得就たし、
かみ 寝具 あたた ねむりにはいれ

飽食未厭山蔬甘。

やま やさい うま たっぷりたへ 食へ足りない
山の蔬の甘さは飽食ても未厭ほどであった。

山林餓臥古亦有

う え さんりん むかし よくあ
餓臥ても山林にいきるといふことは古から亦有ることだけれど、

無田不退寧非貪。

ろく むさほ ない
わたしはそこまでのことはできないもの
た ない しりぞ ない けっし
田が無から退か不ので 寧
て禄を貪っていたいのではないだ。

展禽雖未三見黜

リヌウカケイという人

さんど

誹謗され

いんたい

かいすう

まだおよばない

展禽のように三も見黜て引退したのには回数では雖未

れど、

叔夜自知七不堪

ケイコウという人 自分

なな

た

ない

し

や

おな

叔夜が自には七つの堪えられ不ことがあると知って辞めたのと同じ

おも

わたし

ような思いが私にはある。

行当投効謝簪組

いずれ

きつ

辞表を書い

官服を脱ぐ

行は当と投効て謝簪組であるうから、

為我佳処留茅庵

わたし

ため

いい場所

やま

粗末ないおり

結べる

私の為に佳処をのこしてこの山に茅庵を留ようにしておいてほし

い。

■甘露寺

かんろじ
甘露寺

江山豈不好

かわけ　やま　まことによすぎる
ここらは江も山も豈不好くらいなので、

独遊情易闌。

ひと　あそ　気分　たかぶりやす
独りで遊ぶと情が闌易い。

但有相携人、

とにか　いっしょ　ひと　あ
但く相携にいく人が有ればいいので、

何必素所歆。

たぶんもと

遊び仲間

何必素からの所歆でなくてもいいのだ。

我欲訪甘露

わたし

かんろじ

たず

よう

我は甘露寺を訪ね欲として、

当途無閑官。

要職

当途にあるひとたちで閑をかこう官さんは無かったので、

ひま

お役人

いな

二子旧不識、

ふたり

もと

知り合い

なか

二子とは旧からの識では不ったのだけれど、

欣然肯聯鞍。

よろこん

くら

ならへ

ましよう

欣然で鞍を聯べ肯ということになった。

古郡山為城、

ふるくゆかりやま古郡のあるこの山はひとつの城しろのようにな為っていて、

層梯転朱欄。

階段重なあからんかんぐるっ梯はしが層りあって朱欄あからんかん干ぐらっが転とめぐっている。

楼台断崖上、

ろうだいだんがいうえ楼台ろうだいが断崖だんがいの上うえにあり、

地窄天水寛。

ちすぼまてんみずひろがそこで地ちが窄すぼまって天てんと水みずが寛ひろがっている。

一覽呑数州、

ばつとみすうしゅうめの一覽ばつとみて数州すうしゅうをめ目のに呑むかのようで、

山長江漫漫。

やま とお かわ まんまん

山は長く江は漫漫とながれている。

却望大明寺、

ふりか たいがん たいめいじ み

却って**対岸**の大明寺を望ようとすると、

惟見煙中竿。

ただもや なか さお

そこには惟煙の中に竿のようなものが見えるだけだ。

狼石臥庭下、

こんせき にわ あたり

かの狼石というものが庭の下に臥つて、

穹窿如伏羴。

アーチ状 ひつじ ふ

穹窿のかたちは羴が伏せているかの如だ。

緬懷臥竜公、

はるか おも

緬に懐うのは、諸葛孔明ここで臥竜公が、

挾策事瑠鑽。

軍略 たて もっぱ ねりあげ

策を挾て事ら瑠鑽ていたことを。

一談収獅子、

ひとこと 孫権 なつとく

そして一談で獅子を収させ、

再説走老瞞。

ふたこと 曹操 やい

再説で老瞞を走ったのだった。

名高有余想、

たか いまもおもわせる

その名は高く余想ものが有るのだけれど、

事往無留觀。

こと おわ
事が往つてからは観えるなにかを留ては無い。

蕭公古鉄鑊

梁の武帝 ふる てつ かま
ここには蕭公の古い鉄の鑊だというのもあって、

相對空团团。

むな ころころ おきあ
空しく团团と相對っている。

陂陀受百斛

たふたふ ひやくこく みず う
陂陀と百斛もの水を受けたというが、

積雨生微瀾。

長年の雨 こまか さび しよう
積雨で微く瀾が生じてしまっている。

泗水逸周鼎

しすい 泗水には周しゅうちよう朝の鼎かなえが逸しずみ、

渭城辞退漢盤。

長安 渭城からは漢朝かんちようの盤受け皿が辞なくなったということがあった。

山川失故態

やま 山も川かわも故もとの態すがたを失なくすものであるのに、

怪此能独完。

こ 此かまだけの**鑊**もとのまま独あやが完あやにあるのを怪しくおもう。

僧繇六化人

また僧繇そうえいが**描**えがいた六枚ろくまいの化人菩薩の画ががあり、

霓衣掛冰紈。

かるやかなころも

あざやかなこおり

か

霓衣は氷紈を掛けたかようである。

隠見十二畳

ろくまいじゅうに面

かくみ

六枚十二畳に隠れ見えるそれらは、

観者疑誇謾。

み

もの

うそほい

うたが

観る者に誇謾と疑わせるところがある。

破板陸生画、

やぶ

かべいた

陸探微

が

破れた壁板には陸生の画があり、

青猊戲盤跚。

あお

さる

ひよこひよこ

たわむ

青い猊が盤跚と戯れている。

上有二人人

うえ てんじょう
ふたり てんにん
上の天井には二人の天人が有て、

揮手如翔鸞。

て ふ
とふどり よう
手を揮るうさまは翔鸞の如である。

筆墨雖欲尽、

ひつぼく ちから
つ よう
筆墨の力はここで尽き欲としたようだ
けれど、

典型垂不刊。

もはん
くちることなく
のころ
典型となつて不刊いまに垂のである。

赫赫贊皇公、

輝く
李徳裕
さらに赫赫ばかりの贊皇公の画は、

英姿凜以寒。

すばらしいすがた きりつ

その英 姿は凜としていて以寒とさせる。

ぞくつ

古柏親手種

ふる かしわ

古い柏は李徳裕が親しく手で種えたもので、

りどくゆう した

て う

挺然誰敢干。

挺きん出て高

挺然くて誰も敢干ことができない。

だれ やたらにふれる

枝撐雲峰裂

えだ くも みね

その枝は雲の峰が裂けるのを撐え、

ささ

根入石窟蟠。

ね いし あな

その根は石の窟がふかく蟠るところにまで入りこんでいる。

わたかま

はい

薙草得断碑

りどくゆう李徳裕がつたえるところでは、ここで草を薙くさったところ、古い石碑ふるせきひの断片たんぺんが得えられ、

斬崖出金棺

がけ けずきん ひつぎ で

崖を斬ると金の棺が出たという。

瘞蔵豈不牢

きつとしつかり うずもれてかく豈不牢と瘞蔵うずもれてかくれていたはずなのに、

見伏理可嘆

あらわかくわけ はたまた見れたり伏れたした理は可嘆わけ はたまたどういうことだったのだろうか。

四雄皆竜虎

しよかつこうめい　そんけん　りよう　ぶてい　りどくゆう　よにん　えいゆう　みなりゆう　とら
諸葛孔明、孫権、梁の武帝、李徳裕の四人の英雄は皆竜か虎で、

遺跡儼未剋。

いせき　しつかり　ありありのこっている
その遺跡は儼と未　剋のである。

方其盛壯時、

そ　ちよう　意気さかん　とき
其のひとたちが方ど盛壯の時には、

争奪肯少安。

そうだつ　すこ　やす　いられ
争奪がはげしくて少しも安らかで肯はしなかつただろう。

廃興属造物、

よ　こうはい　ぞうぶつしゆ　手の内にある
世の興廃は造物主の属　のだから、

遷逝誰控搏。

うつりかわり だれ あれこれ
遷逝は誰も控搏できるものではない。

況彼妄庸子、

まし あ ほんくら
況て彼の妄庸子どもが、

而欲事所難。

しか むずか こと しおわせ して
而も難しい所を事ようと欲もどうにかなるはずがないのだ。

古今共一軌、

むかし いま ひと 法則 おな
古も今も一つの軌は共じであって、

後世徒辛酸。

時代を下る むだ 苦 勞
後世につれて徒な辛酸をしているのである。

聊興広武嘆

聊とばかり 広 武との嘆きを興しかあるまいか、
ちよい 英雄はいなくなった なげ する

不待雍門弾。

雍門を弾いて待わなくてもよいであろう。
涙を誘う曲 ひ もら なく

■ 初到杭州寄子由二絶

杭州に到た初りで子由に寄せた二首の絶句
こうしゅう つい ばか おとうと よ にしゅ ぜっく

眼看時事力難勝

眼に看るところの時事はわが力には勝え難いことばかりだけれど、
め み 世間の動き ちから た にく

貪恋君恩退未能。

君の恩を貪り恋つて未だ退くことができないでいる。
皇帝 おん むさぼ した ま しりぞ でき

遅鈍終須投効去、

ぐずでまぬけ

ついで

きつ

辞表を書い

さ

遅鈍であるから終いには須と投効て去るべきで、

使君何日換聾丞。

知事

そのうち

役立たずのわたし

か

そうでなくても使君は何日聾丞を換えることであろう。

*

*

聖明寛大許全身、

へいかに せいめい

かんだい

わたし

み

まこと

ゆる

陛下は聖明にして寛大で、私の身を全うすることを許してください

た、

衰病摧頽自畏人。

おとろ

や

くだぐた

自然

ひと

おそ

しかしわたしは衰え病んで摧頽となって自と人を畏ればかりい

る。

莫上岡頭苦相望

君は岡の頭によつて苦にぼくの方を相望みようとしてくれなくて

もよいだろう、

吾方祭竈請比隣。

吾は方ど竈の神様を祭つて君の比隣にいくことを請っているのだから。